

塩野西遺跡群

# 細田遺跡

——長野県北佐久郡御代田町細田遺跡発掘調査報告書——

1993

長野県御代田町教育委員会

塩野西遺跡群

# 細田遺跡

——長野県北佐久郡御代田町細田遺跡発掘調査報告書——

1993

長野県御代田町教育委員会

# 解 説

- 1 本書には、1992年に実施した長野県北佐久郡御代田町に所在する細田（ほそだ）遺跡の発掘調査で出土した遺構・遺物が掲載されている。
- 2 今回の調査でわかったこと

## (1) 縄文時代（狩猟・採集の時代）

およそ6千年と4千5百年前の縄文土器がみつかった。しかし、住居址、墓などの穴はみつからなかった。

## (2) 弥生時代（稲作農耕が始まった時代）

御代田町ではじめて1千7百年前の弥生時代の農村が発見された。しかもそれは標高810mの高冷地にあり、佐久地方の弥生時代の稲作の限界ラインと言われた、標高720mをはるかに越えるものであった。町の歴史の空白を埋めると同時に定説をも覆す貴重な発見であった。

この村は最終的には9軒で構成された小さな村で、南側の「ハルキ沢」と呼ばれる現在でも町内の一等水田地帯で水田を開拓したようだ。

また、古墳時代に至ると下段にある塚田遺跡へ集団で移動し、立ち去るに当たって村の一部を焼きはらっていった跡がみられた。

村の中では壺・高坏・鉢などを赤く彩るなど千曲川流域に特徴的な弥生土器が使用されていた。これらの土器の分析から細田遺跡の弥生農村は弥生時代終末（日本列島では古墳の築造が始まったころ）に造られたことがわかった。

## (3) 平安時代（京の都では貴族が華やかな生活を送った時代）

1千百年前・9世紀後半の竪穴住居址が一軒だけみつかった。カマドなど火処はなく、特殊な匂いのする住居である。



標高810m弥生農村の誕生 上、細田・塚田遺跡空中写真 下、細田遺跡弥生集落の想定図







浅間山麓に位置する塩野西道跡群(1991.晩秋)



細田遺跡からみたハルキ沢



焼失した住居（Y.5号住居址）



細田遺跡の弥生土器群



赤い土器集合

## 例 言

- 1 本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の細田遺跡<sup>ほそだ</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、北佐久地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
- 3 本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。
- 4 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。
  - ◎ 遺物復原 伴野有希子、小山内玲子、竹原久子、内堀久代、田村朗子、掛川孝子、佐藤夫美子、萩原正子。
  - ◎ 遺物実測 鳥居 亮、小山岳夫、シン航空写真株。
  - ◎ 遺物拓本 内堀久代。
  - ◎ 遺物トレース 鳥居 亮。
  - ◎ 遺構トレース 鳥居 亮。
  - ◎ 遺構写真 堤 隆、鳥居 亮、小山岳夫。
  - ◎ 遺物写真 鳥居 亮。
  - ◎ 遺物観察表作成 小山岳夫。
  - ◎ 版 組 み 内堀久代。
- 5 本書に使用した航空写真は、株協同測量社が撮影したものである。
- 6 本書の執筆分担については、文責を目次に明記してある。
- 7 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、小山岳夫がおこなった。
- 8 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

田中正治郎、西山克己、桐原健、宮下健司、川島雅人、諏訪問順、諏訪問伸、櫻田誠、新田浩三、林幸彦、羽毛田卓也、高村博文、三石宗一、福島邦男、村沢正弘、大上周三、山下誠一、花岡弘、近藤尚義、中田英、白田武正、寺島俊郎、木内捷、原明芳、伊丹徹、宮崎憲二、児玉卓文、百瀬長秀、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、市沢英利、領塚正浩、下平博行、賛田明、品田高志、石黒立人、石坂俊郎、村田健二、中山誠二、大木紳一郎、黒田晃、坂井隆、伊藤隆、小野和之、山口逸弘、木村収、若狭徹、伊藤敏行、青木和明、青木一男、神村透、千野浩、飯島哲也、寺島孝典、前島卓、塩崎幸夫、尾見智志、直井雅尚、島田哲男

# 凡 例

## 1 遺構の名称

Y→ 弥生時代竪穴住居址 H→ 平安時代竪穴住居址 D → 土坑

M→ 溝状遺構

## 2 遺構のナンバーは、時代別に付してある。

## 3 挿図の縮尺

竪穴住居・掘立柱建物・土坑=1:80、炉=1:40、溝状遺構=1:400

土器=1:4、石器=4:5、1:2、1:3

以上が基本的なものである。これ以外のもも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。

## 4 図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、土器が1:3、小形石器2:3、石器1:2、大形石器1:3  
で、その縮尺は図版中に明記してある。

## 5 遺構面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

## 6 平安時代の出土遺物一覧表〈石器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、-は不明、( )は推定値、< >は大幅な推定値を示す。単位はcmである。

## 7 出土遺物一覧表〈石器〉の法量は、-は不明、( )が現存値、( )がない場合は完存値を表わす。単位は、cm・gである。

## 8 遺構の層序説明は本文中に記した。

## 9 土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

## 10 挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表わす。

### (1)遺構

遺構断面=斜線 ただし、切り合いによる破壊部分は斜線を逆方向にした。

貼り床=網点(細)

焼土=網点(霞)

### (2)遺物

土器断面 縄文前期 含繊維土器断面=網点(細)

土器内外面 土師器 黒色処理=網点(太) 赤色塗彩=網(%)

石器外面 砥石研砥面範囲・石器使用痕範囲=網点(太)

# 目 次

口 検  
解 説  
例 言  
凡 例  
目 次

I	発掘調査の概要	小山岳夫	1
I	発掘調査の概要		3
(1)	調査に至る動機		3
(2)	発掘調査の概要		4
(3)	発掘区の設定と遺構の検出		5
(4)	発掘調査の経緯		7
II	遺跡の環境		9
I	遺跡の環境	森川宗治	11
(1)	自然環境		11
(2)	歴史環境		11
2	層 序	小山岳夫	17
III	遺構と遺物		19
I	弥生時代後期の竪穴住居址	小山岳夫	21
(1)	Y-1号住居址		21
(2)	Y-2号住居址		24
(3)	Y-3号住居址		26
(4)	Y-4号住居址		31
(5)	Y-5号住居址		34
(6)	Y-6号住居址		39
(7)	Y-7号住居址		40
(8)	Y-8号住居址		43

(9) Y-9号住居址	47
(10) Y-10号住居址	51
(11) 弥生住居内出土の縄文土器	下平博行 54
2 平安時代の竪穴住居址	小山岳夫 56
(1) H-1号住居址	56
3 土坑	小山岳夫 58
(1) D-1~19号土坑	58
4 溝状遺構	小山岳夫 61
5 その他の出土遺物	賛田 明 62
IV 総括	小山岳夫 65
1 細田遺跡出土弥生土器の位置付け	67
(1) はじめに	67
(2) 出土土器の分類	67
(3) まとめ	70
2 細田遺跡の弥生集落	74
(1) はじめに	74
(2) 細田遺跡弥生集落の沿革	74
(3) 佐久地方の弥生集落概観	77
(4) まとめ	82
3 その他の遺構・遺物	83
V 付 編	85
細田遺跡における自然科学分析	マリノ・サーヴェイ株式会社 87
VI 写真図版	107

I  
発掘調査  
の概要

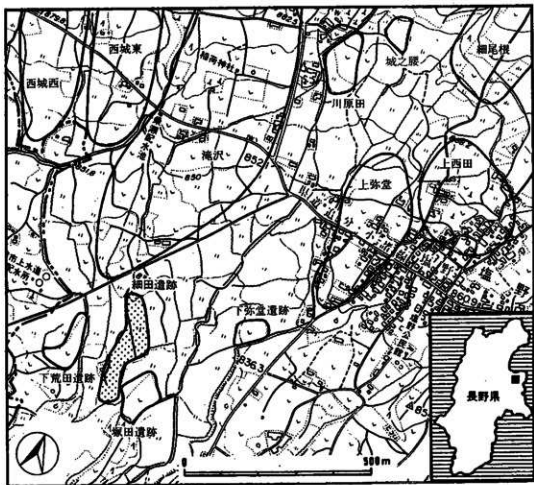


# 1 発掘調査の概要

## (1) 調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字塩野・小諸市大字塩野・八幡・柏木にかかる一帯、北大井地区において、水田経営の合理化を目的とした県営土地改良総合整備事業が平成2年より実施された。

一方、この地区には周知の遺跡が群在化しており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である佐久地方事務所と、保護部局である長野県教育委員会、御代田町教育委員会の三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し、5ヵ年計画で記録保存をはかることとなった。



第1図 細田遺跡（網点）と周辺の遺跡分布（1：10,000）

## 1 発掘調査の概要

これを受けて、平成元年には翌年度工事実施地区にかかる弥堂・細尾・上西田・城之腰・川原田遺跡の5遺跡について試掘調査、平成2年度には城之腰と川原田遺跡の発掘調査、下弥堂・細田・塚田・下荒田遺跡の試掘調査、翌平成3年に前年試掘の4遺跡の本発掘調査が実施された。

## (2) 発掘調査の概要

- |        |  |
|--------|--|
| 1 遺跡名  | 細田遺跡   |
| 2 所在地  | 長野県北佐久郡御代田町大字塩野字細田   |
| 3 発掘期間 | 平成3年4月24日 ～ 平成3年5月31日 (平成3年度)<br>平成3年10月1日 ～ 平成3年10月12日 (平成3年度)                                      |
| 4 整理期間 | 平成3年11月1日 ～ 平成4年3月30日 (平成3年度)<br>平成4年4月16日 ～ 平成5年3月31日 (平成4年度)                                       |
| 5 発掘理由 | 平成3年度北大井地区県営土地改良総合整備事業に伴い、細田遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行なう。  |
| 6 発掘方針 | 広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。   |
| 7 費用負担 | 調査費用総額のうち、77.5%は原因者である農政部局(佐久地方事務所)が負担し、残りの22.5%については文化財補助事業として文化財保護部局が負担した(国庫補助金50%、県補助金15%、町費35%)。 |
| 8 事務局  | ◎ 教育次長 山本岩正・藤巻典紀 ◎ 社会・同和教育係長 萩原茂、古越恵美夫 ◎ 社会・同和教育係 飯塚守、内堀健司、堤 隆、小山岳夫                                  |
| 9 調査団  |  |
| 顧問     | 柳沢 薫(御代田町長)  |
| 参 与    | 桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、小林太郎、大井源寿<br>萩原弘祐(御代田町文化財審議委員)  |
| 団 長    | 土屋秀憲(御代田町教育長)  |
| 担 当 者  | 堤 隆・小山岳夫(御代田町教育委員会)  |
| 調 査 員  | 鳥居 亮(主任)、吉井雅勇  |
| 補 助 員  | 伴野有希子、小山内玲子、竹原久子、高地正雄、森川宗治、小口達志、小林嘉孝   |
| 協 力 者  | 尾沼けさと、山本まさる、飯田すえの、内堀ときい、日向万平、日向愛子、古川まち子、古越邦和、茂木秀雄、掛川孝子、萩原正子、内堀久代、佐藤夫美子、井出貞重                          |

### (3) 発掘区の設定と遺構の検出

本調査の発掘区については第3図に示したとおりで、図の約12,101㎡が該当する。

この発掘区については、土地改良総合整備事業に関する遺跡全体のなかで把握できるように、国家座標第VIII系を用い、20m四方のグリッドを設定した。したがってグリッドのY軸は真北を指すようになっている。グリッド名は、Y軸について北側から1・2・3～、X軸について西からA・B・C～とした。

調査は、調査対象区についてまずは自然地形と遺跡の範囲をみきわめるため、重機により東西・南北に試掘トレンチを入れてみた。その結果およその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができたので、つぎに遺跡全部の表土を重機によって除去した。

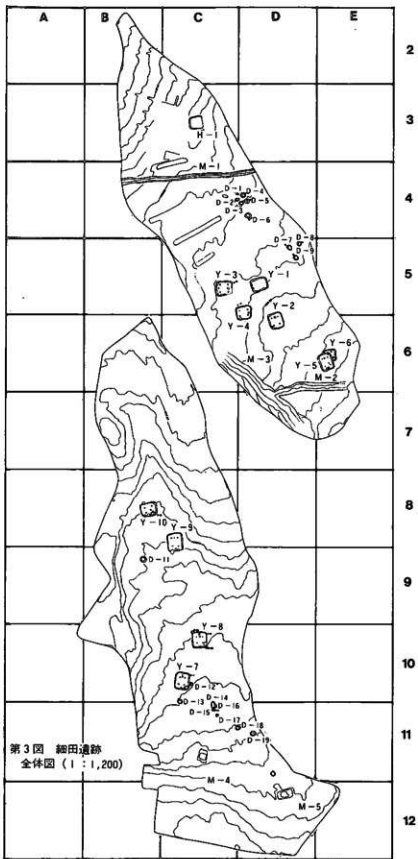
調査地区から検出された遺構の概要は第1表のとおりである。

第1表 細田遺跡の検出遺構数

遺構 時期	竪穴式住居	土坑	溝状遺構	その他	計
	弥生後期	10	19	0	
平安	1	0	0	0	1
不明	0	0	5	0	5
計	11	19	5	0	35



第2図 中央・細田遺跡、下・塚田遺跡、上・下芟田遺跡



#### (4) 発掘調査の経緯

平成3年度

4月22日

細田遺跡Ⅰ区表土削平開始。

4月24日

発掘調査開始。北包含層の調査。

5月15日

弥生住居5軒・土坑検出。遺構調査開始。

5月28日

住居調査継続。Y-5号焼失住居探査。

5月31日

弥生住居計6軒、平安住居1軒、土坑10基の調査終了。細田遺跡Ⅰ区完掘。

9月11日～14日

細田Ⅱ区表土削平

10月1日

Ⅱ区弥生住居(4軒)調査開始。

10月11日

住居址の調査は終了。

10月12日

航空測量のため全体清掃。

11月1日～平成3年3月30日

遺物整理。

平成4年度

平成4年4月16日～平成5年3月31日

遺物整理。土器復原、土器拓本、土器実測報告書作成をおこなう。

3月31日

発掘調査報告書刊行。



第4図 表土除去と北包含層の調査



第5図 北包含層の調査



第6図 Ⅱ区弥生住居址の調査



第7図 整理作業





II  
遺 跡  
の環境





# 1 遺跡の環境

## (1) 自然環境

細田遺跡は、浅間山南麓の細い尾根上に位置しており、標高820m内外を測る。

遺跡の背後にそびえる浅間山は標高2,560mを測り、その火山の形態（コニーテ型の裾野・三重式噴火口・寄生火山など）から、わが国においても代表的な活火山といわれており、現在も盛んにその活動を続けている。

浅間火山の最初の噴火は、およそ数万年前から始まったといわれ、その変遷は、古い順から黒班山期（数万年前）・仏岩期（1万5千年前頃）・軽石流期（1万4千年前～1万1千年前頃）・前掛山期（数千年前）とされている。ちなみに、前掛山期における天仁元年（1108年）及び天明3年（1783年）の噴火は、歴史時代の記録に残る大噴火として、あまりにも有名である。

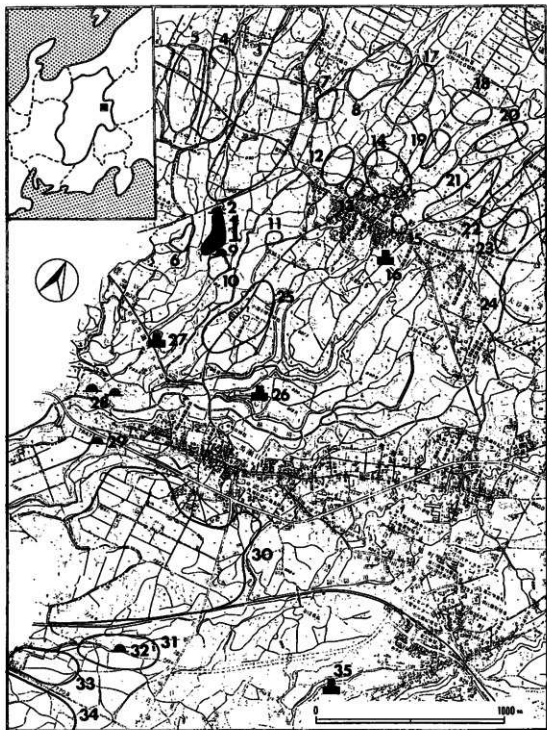
この地域の基盤層は、その浅間山の火山噴出物により構成される。本遺跡の基盤層は主として軽石流期のうち、第2軽石流による堆積物からなっている。また、天仁元年の噴火によると推定される追分火砕流堆積物は、本遺跡の約1km以東の御代田町・軽井沢地域を覆っている。

ところで、この遺跡を包括する標高800～900m地帯は、浅間山麓の第一伏流水が、地表の各所に湧出する地帯である。本遺跡の北側、真楽寺の「大沼の池」をたたえる豊富な湧水を始め、本遺跡の東方の湧玉の湧水など随所に湧水がみられ、往時の集落形成のための要件となっている。なお、湧水や河川の流下は、山麓末端部の軽石流堆積物を刻んで、当地方特有ないわゆる「田切り地形」を発達させている。

さて、この地帯の現在の植生を見ると、北側に植付されたカラマツの林地があり、これにアカマツ、クリ、などが点在している。縄文時代以降の自然植生を想定するなら、コナラ類やクリなどの落葉広葉樹を主とする自然林を含む景観が展開したと見て、差し支えないであろう。

## (2) 歴史的環境

細田遺跡の位置する浅間山南麓の標高800～900m内外には、さきに述べた豊富な湧水や動植物など生活環境や自然環境を背景に、縄文時代を中心とし弥生・古墳・奈良平安時代の、数多くの遺跡が分布している（第8図）。近年の発掘調査成果にも基づいて、以下には時代ごとに遺跡のあり方を追ひ、歴史的環境についてふれてみたい。



第8図 細田遺跡と周辺の遺跡分布 (1 : 20,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代					備考	
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安		中世
1	城之腰	御代田町大字塩野字城之腰		○			○	○	1990年発掘調査
2	川原田	川原田		○			○	○	1990年発掘調査
3	滝沢	滝沢		○			○		1992年発掘調査
4	東荒神	東荒神		○			○		
5	西荒神	西荒神		○			○		
6	下荒田	下荒田			○		○		1991年発掘調査
7	細田塚古墳	細田				○			1991・1992年発掘調査
8	細田	細田			○		○		1991年発掘調査
9	塚田古墳群	塚田				○			1991年発掘調査
10	塚田	塚田		○		○			1991年発掘調査
11	下弥堂	下弥堂		○					1991年発掘調査
12	上弥堂	弥堂		○					
13	西島	西島			○				
14	上西田	上西田		○					
15	下藤塚	下藤塚		○					
16	塩野城	荒屋						○	
17	細尾根	細尾根		○			○		
18	広畑	広畑		○			○		1987年発掘調査
19	登窪	登窪		○					
20	西駒込	西駒込		○					1991年発掘調査
21	上藤塚	上藤塚		○					
22	東二ッ石	東二ッ石		○					1991年発掘調査
23	塩野西原	西原		○					
24	湧玉	湧玉		○					1991年発掘調査
25	馬場	馬場					○		
26	馬瀬口城	御代田町大字馬瀬口字北原						○	
27	東十石城	東十石						○	
28	めがね塚古墳群	尻場				○			
29	下原古墳群	下原				○			1974年発掘調査
30	下前田原遺跡群	西向原					○		
31	根岸	御代田町大字御代田字根岸					○		1987年発掘調査
32	根岸古墳	根岸					○		
33	十二	十二					○		1986年発掘調査
34	前田	前田				○	○		1985年発掘調査
35	谷地城	榎場						○	

## II 遺跡の環境

### 縄文時代

まず、縄文時代の草創期では、川原田遺跡(第8図7)から「有舌尖頭器」が出土しており、御代田町においては最も古い時期の遺物として位置付けられる。

縄文時代の早期の遺跡としては、塚田(10)・滝沢(3)・城之腰(8)の各遺跡がある。このうち早期前半の遺物としては、塚田遺跡からは山型文・楕円文・格子目文の押型文土器が、滝沢遺跡及び城之腰遺跡からも楕円押型文土器の破片が出土している。また、つづく縄文早期後半では、塚田遺跡からいくつかの土坑が検出されており、完形復原可能な尖底土器がいくつか認められた。このうち復原された鶴ヶ島台式土器は、県下でも数少ない優品である。このほか田戸上層式土器や、東海系の木島式土器の破片も出土している。

縄文時代前期初頭では、下弥堂遺跡(11)から竪穴住居址14軒と土坑16基からなる集落が検出された。この時期の住居が明瞭なかたちで検出されたこと自体貴重であると共に、それらがまとまった「集落」というかたちで検出されたことの意義は深く、佐久地方のみならず県下でも貴重な事例となった。集落出土の土器は、いわゆる「中道式」とも呼称されるものであり、その豊富な一括資料も注目される。

これにつづく、縄文時代の前期前半の遺跡としては、城之腰・塚田・滝沢II遺跡がある。城之腰遺跡においては、神之木式土器を含む竪穴住居址が5軒、これと同型式を伴う集落が、隣接する塚田遺跡において13軒(平成3年調査)、滝沢II遺跡において6軒検出された。塩野西遺跡群一帯に縄文前期前半の遺跡が概して小規模ながら点在している事実が判明したことは、当時の社会構造復元に寄与すること大である。

さて、縄文時代中期の遺構で注目すべきは、川原田遺跡で検出された竪穴住居址46軒の検出である。その竪穴住居により構成される集落全体の検出は、東日本でも有数の調査事例となったといっても過言ではない。加えてこの集落から出土した土器は、いわゆる「焼町土器」と言われるもので、長野・群馬を中心に近年俄に注目を浴びている土器である。そしてこの遺跡から出土した「焼町土器」は、これまでのものを質量ともにはるかに上回り、最も充実した資料となった。

縄文時代中期末～後期は、今まで川原田遺跡で堀之内式土器が数個分出土しているのみで実態が不明であったが、平成4年度当町滝沢I遺跡の調査で数石住居を伴う集落と墓城の一端、長野県埋蔵文化財センター調査の小諸市三田原・岩下遺跡でやはり数石住居を伴う集落が発掘され、この地域一帯も当該期の良好な資料が整いつつある。縄文時代晩期の資料は近隣では小諸市石神遺跡が代表的で他からは今のところ見つからない。

### 弥生時代後期～古墳時代初頭

弥生時代後期に包括される遺跡には、細田(1)・下荒田(6)遺跡がある。細田遺跡からは、竪

穴住居址10軒が検出されている。従来、当町一帯の地域は、標高が高く気温が低いことから、稲作が営まれ始めて間のないこの時代の遺跡は存在しないのではないかと言われてきた。しかし、はからずも平成3年の発掘調査によってこの時代の住居址が確認されたのである。ただ、遺跡付近では残念ながら水田跡は検出されなかったが、当時の人々が付近の湿地などを利用して水稲耕作を行っていたことは十分に推測され得る。一方、下荒田遺跡からは、当該期の竪穴住居址5軒が検出されている。これらの住居址からは、ベンガラで染められた千曲川流域特有のいわゆる「赤い土器」を含む箱清水式土器が一括して出土しており、その資料の幅を増した。いずれにしても標高800m以上の高冷地での弥生時代後期遺跡の発見は貴重な事例といえる。

その弥生時代後期に続く古墳時代初頭では、塚田遺跡より竪穴住居址6軒からなる集落が検出された。そのなかには、長辺10mを測る佐久地方最大の大形住居が含まれている。集落出土の土器群は前時期より継続した様相を呈している。その後、3世紀にわたり塩野地区の遺跡は空白となる。

#### 古墳時代後期

当町の北部馬瀬口・塩野地区には、従前から古墳が散見されていたが、最近の発掘調査（平成3年度）によって、塚田古墳群（円墳5基）の調査がなされた。しかし残念なことに、これらのいずれも畑地造成などにより墳丘が削られ、その存在が明確でなかったものである。したがって1基を除いてはいずれも周溝のみが検出されたにすぎない。また、横穴式石室を持つ細田塚古墳（2）も塚田古墳群に隣接して存在している。

ちなみに、既存の古墳群のうち、国道18号線沿いにある下原1号古墳については、昭和49年に発掘調査され、現在、町の史跡として保存されている。

#### 平安時代

この時代に包括される遺跡は、城之腰（8）・川原田（7）・下荒田（6）・滝沢Ⅱ・Ⅲ（3）遺跡で見つかっている。

川原田遺跡からは、竪穴住居址22軒が検出され、土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。特筆すべきは、土師器のいくつかに「大内寺」もしくは「大平寺」の墨書認められており、文献はもちろん伝承にもない、いわば幻の寺「大内寺」もしくは「大平寺」が、存在したことを想定させる。同時に検出された溝の巡る礎石建物址がその幻の寺院であった可能性も考えられる。このほか竪穴住居址の1軒からは全国で、十例にも満たないといわれる青銅製の火梨斗も出土した。

なお、下荒田遺跡からは、10世紀ごろの竪穴住居址8軒、滝沢Ⅱ・Ⅲ遺跡でもこれと同時期の集落が発掘されている。

## II 遺跡の環境

### 御牧「塩野牧」と東山道

平安時代の当地域は、延喜式に見られる御牧「塩野牧」が存在したといわれている地域である。現在、その「塩野牧」の遺構とみられ、通称、「駒飼の土堤」と呼ばれる一辺50mの方形状の土堤構築物が、本遺跡の北東約1kmの、塩野山地帯に残っており、塩野山遺跡として町の指定史跡になっている。

なお、この「塩野牧」の明確な範囲については不明であるが、その入口は、櫛口（ませぐち）とももされた現在の御代田町馬瀬口と推定されることや、駒などのついた牧に由来する地名から考えるに、相当広範囲に及んでいたことが推定される。先に述べた城之腰・川原田・下荒田・滝沢の各遺跡も当然この範中に包括されていたものと考えられる。したがって、これらの遺跡の集落に住んでいた人々について、「塩野牧」との何らかの係りも想定できないことはない。

さて、延喜の官道といわれる「東山道」が、当時、本地域を横断していたことが推定されている。小諸から東進した「東山道」は、軽井沢・碓井峠を経て群馬へと通ずるが、そのためには必然的に本地域近隣を通過せねばならない。本地域では、残念なことにこれまで「東山道」そのものの発見には至っておらず、またその通過ルートについても諸説が提示されたままで決着に至っていない。想定されている「東山道」通過ルート説は、大きくは3つあって、それぞれ「小田井ルート」・「馬瀬口ルート」・「塩野ルート」となっている。ここで、仮に、「塩野ルート」を採った場合、奈良平安時代の塩野西遺跡群の一連の集落付近をこの「東山道」が通っていたこととなり、その関連も無視できない。

ところで、昭和59年から62年にかけて発掘調査のなされた鑄師屋遺跡群(31～34)では、奈良平安時代の集落が充実して検出された。それに伴って多数の馬骨も出土したことなどから、鑄師屋の集落は「東山道」や「御牧」に関連が深いとする見解がある。かつて一志茂樹氏も、「東山道長倉駅」が存在したのは鑄師屋遺跡群に隣接する中屋敷地帯（小田井ルート）であると推定した経緯がある。鑄師屋遺跡群前田遺跡では、「長倉寺」と墨書された土器も検出されており、その関連性も窺わせている。本遺跡以外にもそうした関連性が考えられるところである。

## 中世

城之腰遺跡(8)では、13世紀代の小集落の存在が明らかになった。

また、本遺跡の周辺には、「塩野城」(16)・「馬瀬口城」(26)とされる史跡が、中世城郭として周知されている。ちなみに、本遺跡の南方5kmに位置する金井城跡については、破格の8万㎡が調査され、16世紀における駐屯知的な中世城郭の構造が明らかにされた。

以上、細田遺跡をとりまく歴史的環境について述べてみた。

## 2 層 序

細田遺跡の基本層序については、第9図に示した。以下にその基本層序を説明する。

## I層 耕作土層

黒褐色(10YR2/3)を呈し、粒子やや粗く、やや粘性あり。大粒のバミス・礫を多く含む。層厚20~30cm前後。

## II層 黒色土層

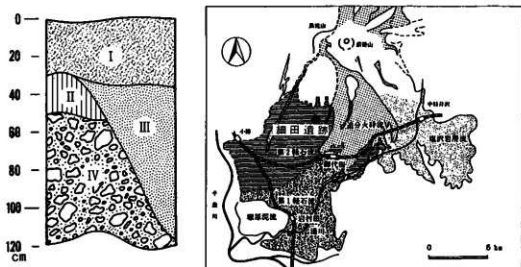
黒色(10YR2/1)。細粒バミスをよく含む。粘性・しまり強い。層厚0~150cm前後。遺跡が立地する南傾斜面の旧状は起伏に富み、凹部分にはこの層が厚く堆積する。上層に縄文前期の土器を包含する。

## III層 漸移層

にぶい黄褐色(10YR4/3)。ローム粒子を多く含み始める。細粒バミスをよく含む。層厚20~25cm前後。

## IV層 ローム層

にぶい黄橙色(10YR6/4)。浅間山軽石流期の第2軽石流堆積物(約1万1千年前)。径15~30mm前後の軽石を主体的に含み、ところにより拳大の軽石を多く含む。



第9図 細田遺跡の基本層序と浅間の火山堆積物の分布





///

遺 構

と遺物



# 1 弥生時代後期の竪穴住居址

## (1) Y-1号住居址

### 住居址 第10図

本址はB-5グリッドにおいて検出された。そのプランは、重機による表土除去の時点でローム層中への黒色の落込みとして明瞭に把握された。平面形は、東西4.96m南北3.84mの隅丸長方形だが、南東壁がくい込むためやや歪んだ形態となる。床面積は17.19㎡を測り、長軸の方位はN-72°-Eを指す。

床面は、地山ローム層を平坦に削って構築されており、貼り床を施した痕跡は見られない。また、平坦化した後、特に叩きしめたり、踏み締めた状況もみられず、脆弱である。

壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、残存壁高13-47cmを測る。壁溝はもたない。

ピットは総数4個が検出された。支柱穴にあたるピットはないが、P<sub>12</sub>は壁柱穴に該当しようか。また、西側壁下中央に並ぶ対ピットP<sub>14</sub>は入口施設に関わる可能性が高い。

炉は精査にもかかわらず確認することができなかった。

覆土は大別2層に分層され、自然堆積の状況を示す。I層は暗褐色土層(10YR3/3)で2mm前後と1cm前後およびこぶし大のバミスを多量、ローム粒子(10YR5/6)を含み、II層は黒褐色土層(10YR2/2)で、2mm前後と1cm前後およびこぶし大のバミスを多量に含む。

以上、本住居址は床面の状況、支柱穴・炉の欠如、微量の遺物など生活臭が薄く、上屋が架かっていたかさえも疑念を持たざるを得ない。竪穴掘削後、建築に至らず放棄したことも考慮しなければならない。

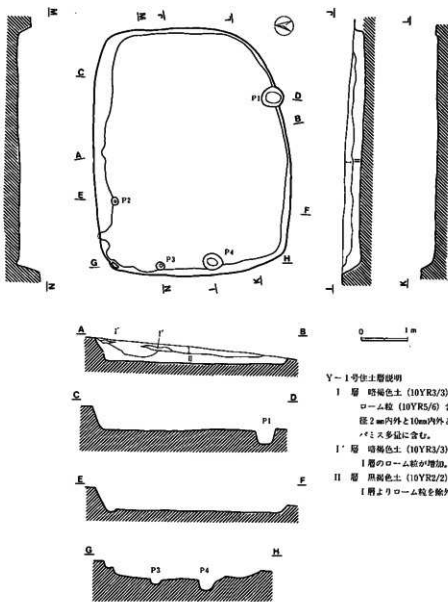
### 遺物 第11図

覆土中および床面上から弥生土器が出土している。器種はほとんどが甕で、他は鉢か高坏の坏部の赤色塗彩された細片が3点あるのみである。いずれも弥生時代後期の特長を示し、図示したものは1点、他14点は拓影である。

全容を知り得る甕はないが、基本的に緩く外反する単純口縁で胴部が軽く膨らむか、やや大きく膨らむものが多いようだ。まれに貼り付け口縁(第11図5)も存在する。

文様は櫛描波状文を施す第11図1-10と斜走文を描く11-17に大別されるが、いずれも口縁部~胴部へ向かって順に文様充填したのち、最後に頸部に二連止め麗状文を廻らせる施文パターンである。

III 遺構と遺物



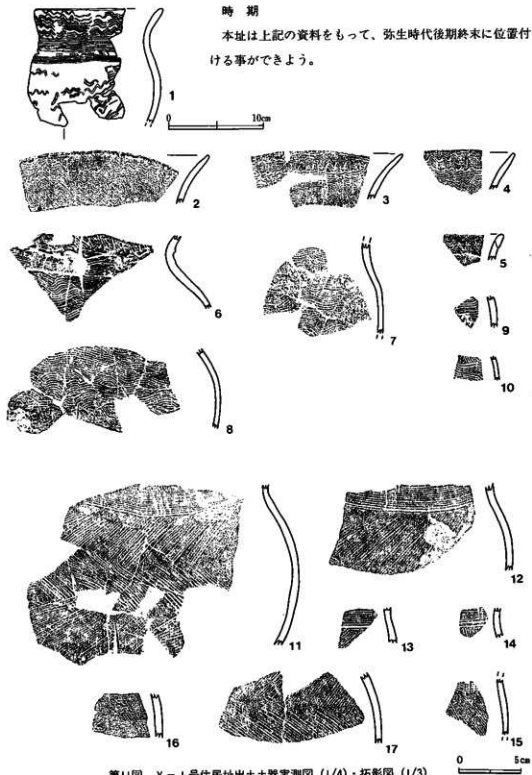
第10図 Y-1号住居址実測図

第3表 Y-1号住居址出土土器観察表

神田 番号	器種	数量	器形の特徵	文様及び調整	備考
I (破)	甕 (甕)	- -	口縁部は破く外反し、胴部は球状に膨らむ。	外側→口縁→胴部に垂直波状文を施した状、胴部に二連上の波状文。 内面→口縁部→胴部に波方向のへうミガキ。	粘土は砂粒を含み、濃い黄褐色 {10YR6/3}

時期

本址は上記の資料をもって、弥生時代後期末に位置付ける事ができよう。



第11図 Y-1号住居址出土土器実測図(1/4)・拓影図(1/3)

## (2) Y-2号住居址

### 住居址 第12図

本址はB-6グリッドにおいて検出された。そのプランは、重機による表土除去の時点でローム層中への黒色の落込みとして明瞭に把握された。

プランは東西4.24m南北4.84mで隅丸長方形を呈する。床面積は19.97㎡を測り長軸方向はN-19°-Wを指す。壁は全体にしっかりしているが、表土除去時点での削平が著しく残存高3~14cm程を測る。壁溝は東から北壁下全域と、いったんどぎれて西壁下に掘り込まれる。

床面は粘性の強い黒褐色土(10YR2/2)とローム(10YR7/6)を混合した土で貼床が全面に施される。一様に堅固にたたき締められており、おおむね平坦である。

炉は北側主柱穴間に設けられる。径45cmの円形を呈する地床炉で、床面から30cm程掘り窪めている。床面には10cm程の焼土の堆積が確認された。

ピットは9個が検出された。主柱穴P<sub>1-4</sub>は竪穴住居内四隅に整然と長方形配置される。いずれも径20cm前後の円形柱穴で、床面からの深さは45~52cmとおおむね揃っている。P<sub>5a</sub>は南壁下に2個一対で並ぶ梯子受け状のピット、北西コーナーのP<sub>7</sub>は貯蔵穴状のピットと考えられるが、南西コーナーに並び溝で連結されるP<sub>5b</sub>については機能が判然としない。

覆土は表土削平時点から薄く、また、遺構検出時に大方掘り上げられてしまったため状況観察が十分になされなかった。

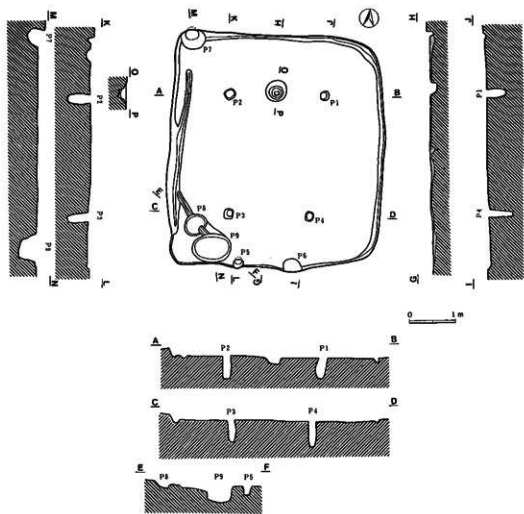
### 遺物 第13図

住居址覆土が薄い事もあり中、遺物量は極めて少ない。床面からわずかに弥生土器が出土している。

器種は甕のほか赤色塗彩された壺の口縁部・胴部、鉢か高杯の坏部、赤色塗彩されない壺の胴部が出土している。いずれも弥生時代後期の特長を示しており、図示したものは3点、拓影5点である。1点の台付甕(第13図3)を除き、ほかはすべて甕である。

器形の全容を知り得るものはない。いずれも上半部を欠くが、第13図1は胴部が大きく膨らんで球状を呈すると考えられるのに対し、2は軽く膨らむ程度のものである。また、4は口縁部が直立気味に立ち上がった後、端部が受口状につまみ出される希有な形態を持つ。5~8はいずれも胴下半部の破片である。3の台付甕は比較的小型品である。内外面に丁寧なヘラキガキが施される。

文様は櫛描波状文を施す第13図1・2と櫛描斜走文を描く4~8に大別される。波状文の1・2については文様残存部が少なく施文パターンを読み取ることができない。斜走文の4~8につ



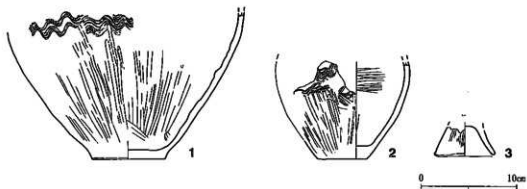
第12図 Y-2号住居址実測図

いても同様であるが、斜走文を交互に組み合わせて横羽状構成をとることはほかの多くの例から確実と考えられる。また、4の斜走文にみられる口縁部における垂直に近い施文は、他遺跡ではあまり多くなく、本遺跡の特長と言える。

#### 時期

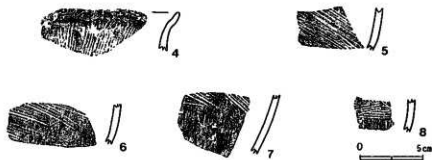
本址は、時期判定に有効な土器資料に欠けるが、断片的な資料をつなぎ合わせると、本遺跡の他住居址出土資料と大きな相違点は見当たらず、弥生時代後期末に位置付ける事ができよう。

### III 遺構と遺物



第4表 Y-2号住居址出土土器観察表

図号	器種	法量	器影の特徴	文様及び調査	備考
1 [記]	甕 (俵)	- (7.5)		外面-胴部中位まで飾縞波状文、以下腹方向へラミガキを施す。 内面-腹方向のラミガキ、剥離著しい。	粘土は砂粒を含み、淡黄色。 (7.5Y7/3)
2 [記]	甕 (俵)	- (5.2)		外面-胴部中位まで飾縞波状文、以下腹方向へラミガキを施す。 内面-腹方向のラミガキ。	粘土は砂粒を含み、にじい褐色。 (7.5YR5/4)
3 [記]	付置 (俵)	- 5.7	「ハ」の字状に開く。	外面-腹方向へラミガキ。 内面-腹方向へラミガキ。	粘土は砂粒を含み、にじい褐色。 (5YR6/4)



第13図 Y-2号住居址出土土器拓影図

### (3) Y-3号住居址

#### 住居址 第14図

本址は、C-5グリッドに位置する。重複関係は持たないが、遺跡確認トレンチ掘削時に北東壁が破壊されている。

その規模は東西4.96m南北4.24mで、平面形状は隅丸長方形を呈する。床面積は20.16㎡を誇る。長軸方向はN-87°-Wを指す。



壁体は割合堅固で残存部で13~40cmを測る。壁溝は存在しない。

床面は粘性の強い黒褐色土(10YR2/2)とローム(10YR7/6)を混合した土で貼床が全面に5~17cmの厚さで施される。一様に堅固にたたき締められており、おおむね平坦である。

炉は北側主柱穴間に設けられる。径62×37cmの楕円形を呈する地床炉で、南側に扁平な縁石(河原石)が置かれている。床面からは浅く10cm程掘り窪められている。底面には焼土の堆積が認められず、わずかに焼け面が認められる程度であった。

ピットは8個が検出された。主柱穴 $P_{1-4}$ は竪穴住居内四隅に整然と長方形配置される。いずれも径30~37cmの円形柱穴で、床面からの深さは $P_{1-4}$ は32~42cmとおおむね揃っている。 $P_{5a}$ は東壁中央南寄りに2個一対で穿たれており、入口に関連する可能性が高い。ほかの住居とは異なった位置にある。また、南西隅のピットについては貯蔵穴と考えられる。 $P_{7a}$ の機能については判然としない。

覆土は黒褐色土のみの単層である。

#### 遺物 第15・16図

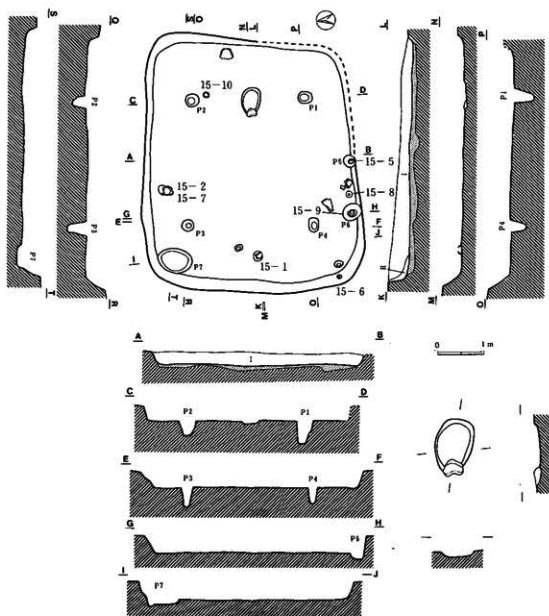
覆土中および床面上から弥生土器が出土している。総体的に出土量が少ない割りに、器種は壺・甕・高坏・鉢など当期の弥生土器組成をほぼ網羅している。いずれの土器も弥生時代後期の土器の特長を示し、図示したものは10点、拓影は14点である。第14図で示したように5・9が対ピット内、8がその周辺から出土している点、また、1は灰白色粒を内蔵し、床上に置かれている点は注目される。また、貼床内から出土した甕の破片がY-5号住居 $P_5$ 内品と接合している。

ほぼ全容を知り得る土器にも恵まれている。赤色塗彩される1は算盤玉状の胴部から、直線的に開く口縁部を持つ広口壺になると考えられる。頸部には簾状文を持つ。今まで千曲川流域の弥生社会の土器組成にはなかった形態である。器肉も薄く、土器への傾斜が感じられる。

甕は簡描波状文(2~4、13~16)と斜走文(11・12・17)が施される2者が認められる。頸部に簾状文を持つ例は11のみである。波状文は振幅が浅く、また、乱雑な施文が多い。2は波状文の断絶箇所がおおむね一致しており、口縁部から胴部へ向かって順に縦区画施文されたことがわかるが、口縁部に関しては最後に文様充填している。形態は口縁部では単純口縁(2・3)と貼り付け口縁(13)の2者がある。胴部は中位で大きく膨らむ2・11・12とほとんど膨らまない3、軽く膨らむ4など様々である。18~22はハケ調整の甕である。

高坏は赤色塗彩され、内湾気味に開く体部から口縁部が外反する坏部を持つ5、脚部に髷を持つ珍品の6がある。赤色塗彩品の7・8、無彩の9・10がある。

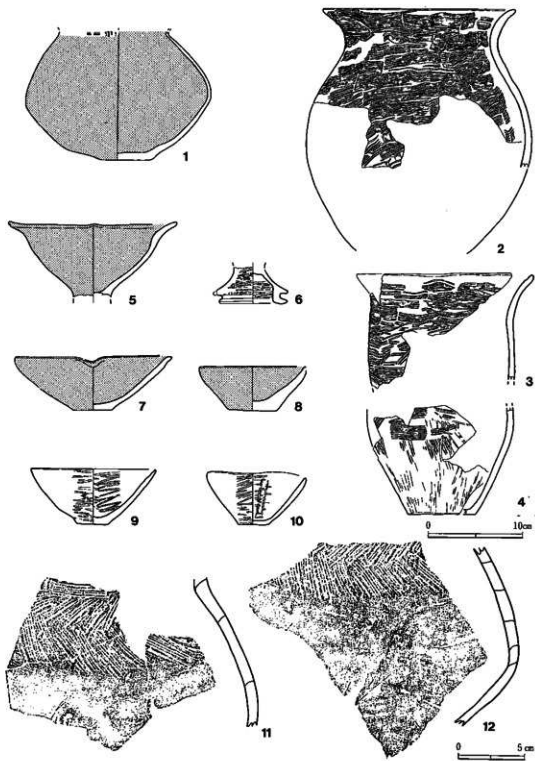
III 遺構と遺物



Y-3号住土層説明

- I 層 黒色土 (10YR2/1)  
 ローム粒 (10YR5/6) 微量含む。  
 径2mm内外と10mm内外のハミス少量含む。
- II 層 黒色土 (10YR1.7/1)  
 粘性・しまりに富み、粒子密。  
 径2mm内外のハミス少量含む。
- 粘床層 点網部分

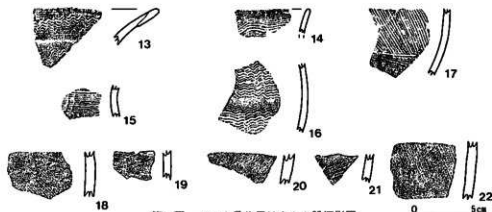
第14図 Y-3号住居址実測図



第15図 Y-3号住居址出土土器実測図(1/4)・拓影図(1/3)

第5表 Y-3号住居址出土土器観察表

調査番号	器種	数量	器形の特色	文様及び調整	備考
1 (泥)	甕 (甕)	— 5, 6	胴部は草蓑玉状を呈する。	外面—全域に赤色塗彩。胴部上段横方向、下位の斜め方向のヘラミガキ。 内面—胴部上段に赤色塗彩。全域にやや斜な横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒をふみ、にがい褐色。 (7.5Y R 7/3) 白色塗彩内 肌。唇表面割離する。
2 (泥)	甕 (甕)	20, 0 — —	口縁部は深く外反し、胴部は球状に大きく膨らみ、最大径を持つ。	外面—全域にヘラ調整後、胴部に帯状波状文を上から下へ施した後、最後に口縁部に二段波状文を施す。内面—口縁部—胴部に横方向のヘラミガキ。並・高坪などの調整具を用いたためか、口縁部に赤色塗彩付着。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10Y R 8/3)
3 (泥)	甕 (甕)	18, 4 — —	口縁部から胴部にかけて非常に深く外反する。	外面—口縁—胴部にかなり戻れた帯状波状文を施す。 内面—ヘラ調整後、胴部に横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10Y R 8/3)
4 (泥)	甕 (甕)	— 7, 1	胴部は中位で軽く膨らむ。	外面—胴部中位まで帯状波状文を、以下腹方向のヘラミガキを施す。 内面—ヘラ調整後、胴部に横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10Y R 8/3)
5 (泥)	高坪 (甕)	16, 4 — —	胴部は内側して傾き、口縁部で外反する。	外面—全域に赤色塗彩。横方向のヘラミガキ。 外面—全域に赤色塗彩。横方向のヘラミガキ。 胴部と胴部はソケット式接合。	胎土は砂粒を含み、にがい褐色。 (7.5Y R 7/4)
6 (泥)	高坪? (甕)	11, 0 — —	胴部が直線上にひだを持つ。	外面—横方向のヘラミガキ。 内面—ナズ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10Y R 8/3)
7 (泥)	鉢 (甕)	15, 7 3, 7 3, 6	体部内側して傾き、口縁部で直立する。	外面—全域に赤色塗彩。横方向のヘラミガキ。 内面—全域に赤色塗彩。横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (7.5Y R 8/4)
8 (泥)	鉢 (甕)	11, 1 4, 8 5, 0	体部内側して傾き、口縁部で直立する。	外面—全域に赤色塗彩。横方向のヘラミガキ。 内面—全域に赤色塗彩。横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (7.5Y R 8/3)
9 (泥)	鉢 (甕)	13, 0 5, 9 2, 1	体部内側して傾く。	外面—横方向のヘラミガキ。 内面—横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10Y R 8/4)
10 (泥)	鉢 (甕)	10, 3 5, 5 2, 1	体部内側して傾く。	外面—横方向のヘラミガキ。 内面—横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (7.5Y R 8/4)



第16図 Y-3号住居址出土土器拓影図

## 時期

以上の出土土器は胴部の大きく膨らむ甕の存在、波状文施文の乱れ、土師的要素を持つ1の存在など弥生時代終末段階の様相を示す。よって本址は弥生時代終末に帰属すると考えられる。

#### (4) Y-4号住居址

##### 住居址 第17図

本址は調査区のD-6グリッドにおいて検出された。重複関係は持たない。

東西3.92m南北4.60mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は17.55㎡を測る。長軸方向はN-82°-Eを指す。

壁高は4~33cmを測り、壁体は堅固である。壁溝は持たない。

床は全面に貼床が施され、堅固で平坦な面を成す。貼床の構成土はY-5号住居址と同様、粘性の強い黒褐色土にロームを混ぜた混合土を用い、丹念に叩きしめたようだ。

炉は奥側の主柱穴間に設けられる。39×36cmの円形を呈する地床炉で南端に2個の緑石(自然礫)を配置する。床面からは6cm程度浅く掘り窪め、焼土が浅く堆積する底面はおおむね平坦面をなす。

ピットは5個が検出された。P<sub>1-4</sub>は主柱穴で住居四隅に整然と長方形配置される。いずれも円形柱穴で径30cm内外とほぼ等しい。深さはP<sub>1-3</sub>は60cm前後とほぼ等しいが、P<sub>4</sub>のみ40cmと浅い。南東隅付近に存するP<sub>5</sub>は深さ32cmを測り貯蔵穴の可能性も考えられる。

覆土は、2層に分層された。I層はロームと少量のバミスを含む黒褐色土。II層はバミスを少量含む粘性の強い黒色土である。

##### 遺物 第18図

覆土中および床面上から弥生土器が出土している。総体的に出土量は少ない。図化した土器は3を除き、ほぼ床面から出土した大形破片が復元されたものであるが、完存品はなく、覆土中の細片とも接合関係を持ち、住居廃絶後投棄されたものと考えられる。

器種は壺・甕・高坏などがある。いずれも弥生時代後期の土器の特長を示し、図示したものは5点、拓影は11点である。

壺は無彩の1と赤色塗彩される2がある。いずれもラッパ状に開く単純口縁で球状の胴部を持つ。1は頸部に栞描直線文を三段描き、その直下に全周しない簾状文を施す。また、図示しなかったが炉の北側から胴下部が括れる大型赤彩壺の破片もある。

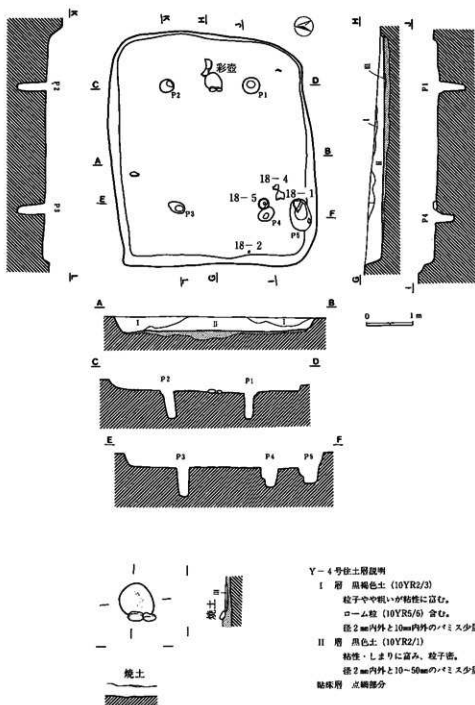
甕は単純口縁のもの(3・6・7)ばかりで胴部が比較的大きく膨らむ形態が多い。文様は栞描波状文(3、6~11)と斜走文(4、12~16)を施す2者が認められる。頸部には簾状文を持つもの(3・4・6)も多い。

高坏は坏下部に隆を持ち中位で直立した後、口縁部が外反する5がある。赤彩品である。

##### 時期

以上の出土土器の特長から本址は弥生時代終末に帰属する住居と考えられる。

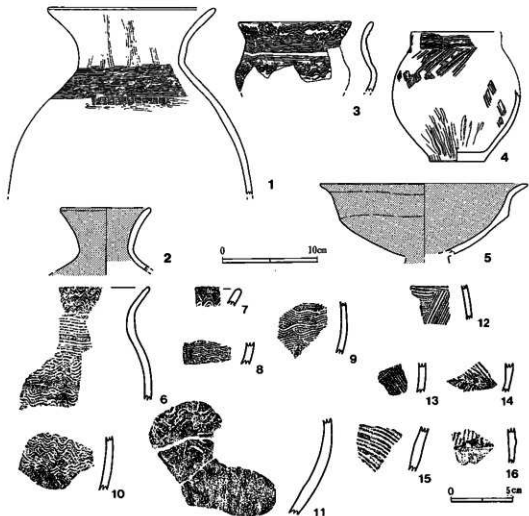
III 遺構と遺物



第17図 Y-4号住居址実測図

第6表 Y-4号住居址出土土器観察表

神田 番号	器 種	注 意	器 形 の 特 徴	文 様 及 び 調 整	備 考
1	壺 (細)	(17.4) — —	口縁部は縦く長く外反し、 胴部は棒状を呈する。	外面—ハケ調整の後、胴部に三段の帯状文を施した後、口 縁部は横方向、胴部は縦方向のヘラミギを施す 内面—金線ハケ調整の後、口縁部—胴部上位置方向のヘラミギを。	胎土は砂粒を含み、淡灰色。 (2.5Y R 7/4)
2	壺 (完)	9.2 (赤) — —	口縁部は胴部から「く」の 字状に屈曲し、縦く外反す る。	外面—口縁部は赤色塗彩、縦方向のヘラミギを施す。 内面—ハケ調整の後、口縁部は赤色塗彩、横方向のヘラミギを。以下ナシ。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色 (2.5Y 8/4)
3	壺 (細)	(13.9) (赤) — —	口縁部は縦く外反する。	外面—口縁—胴部に帯状文を施した後、胴部に二連止の帯状文。 内面—口縁部—胴部に横方向のヘラミギを。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色 (10Y R 7/3)
4	壺 (細)	— (赤) — 5.5	胴部は中位で張らむ。	外面—胴部に二段の斜交文を組み合わせ横帯状構成。後、胴部に二連止の帯状文。 内面—ハケ調整の後、胴部—胴部に横方向のヘラミギを。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色 (7.5Y R 7/4)
5	高杯 (完)	21.6 (赤) — —	口部下位に腹を持ち直立し た縁縁く外反する。	外面—金線に赤色塗彩、横方向のヘラミギを。 内面—金線に赤色塗彩、横方向のヘラミギを。	胎土は砂粒を含み、濃い黄褐色 (7.5Y 6/4)



第18図 Y-4号住居址出土土器実測図(1/4)・拓影図(1/3)

## (5) Y-5号住居址

### 住居址 第19図

本址は、E-6グリッドに位置する焼失住居である。Y-6号住居址と重複関係を持ち、これを破壊する。

その規模は東西3.84m南北5.28mで、平面形状は隅丸長方形を呈する。床面積は19.14㎡を測る。長軸方向はN-19°-Wを指す。

壁体は割合堅固で15~52cmを測り、西側ほど残りが良い。壁溝は北側壁下~西壁・南西コーナーにかけて掘削されており、西壁南寄りに2箇所断絶がある。

床面は粘性の強い黒褐色土(10YR2/2)とローム(10YR7/6)を混合した土で貼床が全面に施される。一様に堅固にたたき締められており、おおむね平坦である。

炉は北側主柱穴間に設けられる。径43×29cmの楕円形を呈する地床炉で、南側に円柱上の縁石(河原石)が置かれている。床面からは浅く10cm程掘り窪められている。底面には焼土の堆積がわずかに認められた。

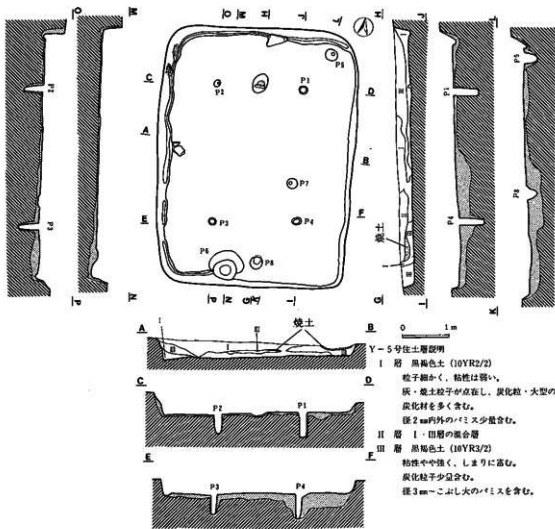
ピットは8個が検出された。主柱穴P<sub>1-4</sub>は竪穴住居内四隅に整然と長方形配置される。いずれも径15cm内外の小こぶりの円形柱穴で、床面からの深さはP<sub>1-4</sub>が29cm、P<sub>2-3</sub>が22cmとおおむね揃っている。P<sub>4-5</sub>は南壁中央西寄りに2個一対で穿たれており、入口に関連する可能性が高い。特にP<sub>4</sub>はプランの周辺北半分に堅く締まった土の堆積が見られ盛り上がっている。北東隅のP<sub>6</sub>、P<sub>1-4</sub>間にあるP<sub>7</sub>については性格不明である。

覆土は3層からなり、焼失した際の堆積物が多く含まれる。I層は大型の炭化材、炭化粒を多く含み、灰、焼土粒子が点在する黒褐色土で焼失前は建築に強く関わっていたと考えられる。各層間に挟まれる焼土層についても同様である。II層はI・III層が混ざって構成される。III層は炭化粒をあまり含まず、大小の軽石を含む黒褐色土である。

### 遺物の出土状況 第20図

覆土中および床面上から弥生土器が出土している。総体的に出土量が少なく、完形品もないため、あらかじめ出火以前か直後に使用可能な土器は片づけられていたことが想定される。出土した土器の器種をみると壺・深鉢・甕・高環などがあり、鉢は欠如する。この内深鉢は全形の大方が欠如、高環は細片のみで、本址の出土土器は主に壺と甕に片寄っている。とても往時の生活奥を残す器種構成とは言えず、偶発的な出火によってはこのような出土状況・器種組成が生み出される可能性は薄い。従って、本址出土土器は破損した不用品であるが故、出火前に用意され、置き去られたと考えるのが適当であろう。





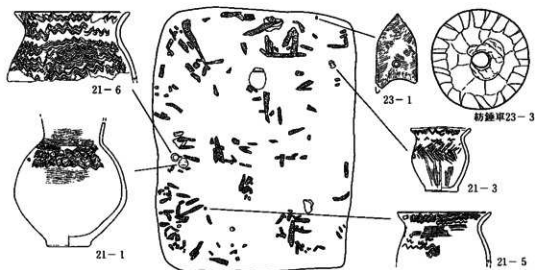
第19図 Y-5号住居址実測図

また、北壁下には遺跡内の他の住居には見られない土製紡錘車と磨製石鏃が出土している。これらの遺物を祭祀的色彩の強い特殊遺物と考えれば、出火原因は故意による蓋然性が強まる。

ところでP<sub>6</sub>内から出土した10は、Y-3住貼床内出土片と接合関係を持つ。

#### 炭化材 第20図

住居中央部に壁に対して平行に存する材と、中央部から放射上に伸びる材が目立つ。焼失した屋根が垂直に落ちた状況を示していると思われる。配置状況から推し量ると入母屋造りが想定されようか。材質については付編(85P-106P)に詳しいが、クヌギ節、コナラ節が最も多く、他にクリ、キハダ、トリネコ属の一種など建築材として比較的多くの樹木が用いられている。



第20図 Y-5号住居址炭化材分布図

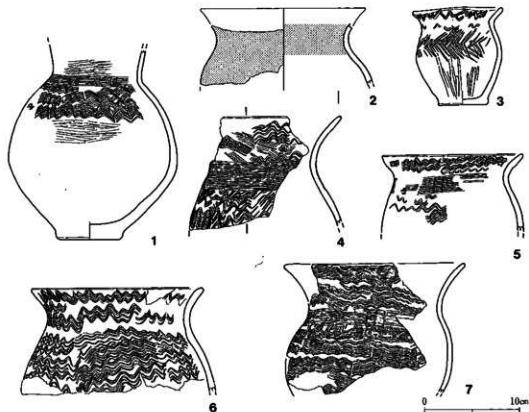
遺物 第21・22・23図

いずれの土器も弥生時代後期の土器の特長を示し、図示したものは7点、拓影は28点である。

ほぼ全容を知り得る土器は3一点のみで他はいずれかが欠けている。壺は群馬県樽式土器と類似する1と図示しなかった赤色塗彩される当地域固有の壺、無彩の壺(35)の口縁部胴部破片がある。1は樽式土器に特有な頸部に櫛描簾状文、胴部に波状文を持つが、器表面をヘラミガキする点は異なる。2は深鉢。3～34は甕で櫛描波状文を描く4～32と斜走文を施す33～34があり、両者を施す3もある。本址に関しては波状文が多い。頸部には簾状文を廻らす4・5・7・8～10と簾状文を持たない3・6がある。形態は様々だが口縁部は単純口縁ばかりで胴部は大きく膨らむもの(4・6～8・10)と軽く膨らむもの(3・5)がある。6は波状文の断絶箇所がおおむね一致しており、図の中央部では口縁部から胴部へ、左の場面では胴部から口縁部へ向かって順に縦区画施文されたことがわかる。その他、一孔を持つ粘板岩製の磨製石鏃23-1、摩石23-2、三角錐状の土製紡錘車23-3がある。

時期

以上の出土土器はからみて本址は弥生時代終末に帰属すると考えられる。

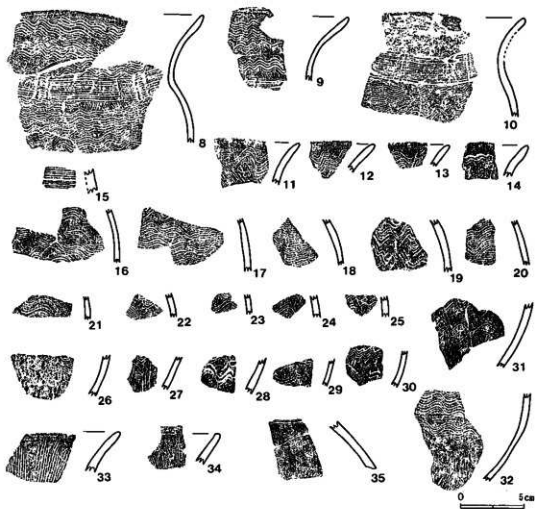


第21図 Y-5号住居址出土土器実測図

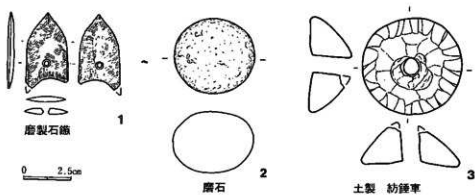
第7表 Y-5号住居址出土土器観察表

标本番号	器種	注量	器影の特徴	文様及び調整	備考
1 (定)	壺	-	胴部は略直立し、胴部は球状を呈する。	外面-全域をハケ調整の後、胴部に二道止の帯状文様を施す。以下上から下へ波状文様。口縁部、胴部とも横方向のヘラミダシ。 内面-胴-胴部に横方向のヘラミダシ。	胎土は黄褐色、灰白色。(19Y R 8/2) 器高・體式系
2 (附)	壺	-	口縁部は縦く外反する。	外面-全域に赤色塗彩。口縁部-胴部横方向のヘラミダシ。 内面-口-胴部赤色塗彩。胴部はナシ。	胎土は砂粒を含み、にじみ色。(7.5Y R 7/3)
3 (定)	壺	9.2 (附) 10.2 5.1	口縁部は縦く外反し、胴部は中位で膨らむ。	外面-胴部に二段の斜定文様を組み合わせた帯状文様を施す。口縁-胴部は帯状文様。 内面-口縁部-胴部の横方向のヘラミダシ、胴部斜方向のナシ。	胎土は砂粒を含み、にじみ色。(7.5Y R 7/4) 二次焼成痕跡あり。
4 (附)	壺	-	口縁部は縦く外反する。	外面-口縁-胴部にハケ調整、帯状文様を施す。胴部に二道止の帯状文様。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミダシ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。(10Y R 8/4)
5 (定)	壺	14.6 (附) -	口縁部は縦く外反し、胴部は中位で膨らむ。	外面-口縁部-胴部に帯状文様を施した後、胴部に二道止の帯状文様。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミダシ。	胎土は砂粒を含み、にじみ色。(7.5Y R 7/4) 器表面割れ痕あり。
6 (附)	壺	17.8 (附) -	口縁部は縦く外反し、胴部は中位で大きく膨らみ最大径を有する。	外面-口縁-胴部にハケ調整の後、帯状文様を施す。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミダシ。	胎土は砂粒を含み、にじみ色。(10Y R 7/4)
7 (附)	壺	(18.7) (附) -	口縁部は大きく外反し、胴部は中位で膨らむ。	外面-ハケ調整の後、胴部に帯状三道止の帯状文様を施す。口縁-胴部に基本的に上から下への帯状文様を施す(但し、口縁部は最後に施す)。 内面-ハケ調整の後、口縁部-胴部に横方向のヘラミダシ、以下ナシ。	胎土は砂粒を含み、褐色。(7.5Y R 7/6)

III 遺構と遺物



第22図 Y-5号住居址出土土器拓影図



第23図 Y-5号住居址出土石器・土製品実測図

## (6) Y-6号住居址

住居址 第24図

本址は、E-6グリッドに位置する。Y-5号住と重複関係を持ち、半分近くを破壊される。その規模は東西3.24m南北3.56mで、平面形状は方形を呈する。床面積は6.09㎡を測る。長軸方向はN-8°-Wを指す。

壁体は脆弱で高さは10cm前後と浅い。壁溝は掘削されていない。

床面は地山をそのまま利用し、おおむね平坦につくられるが壁同様脆弱である。

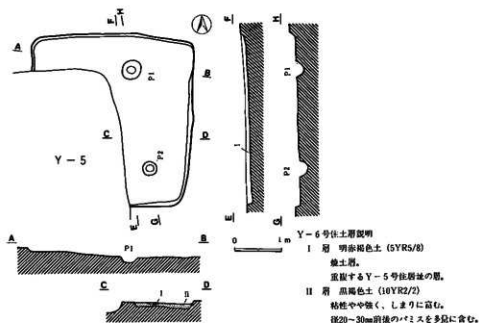
炉は検出されなかった。

ビットは2個が検出された。P<sub>1</sub>は径40cm、P<sub>2</sub>は径30cmの円形ビットであるが、深さは20cmと浅く、位置を見ても柱穴と断ずることはできない。

覆土はY-5号住居址が焼失した際に堆積したと考えられるI層焼土層(5YR5/8)とII層黒色土(10YR2/2)で構成される。

時期

出土遺物がなく、不明確であるが一応弥生時代と考えておきたい。



第24図 Y-6号住居址実測図

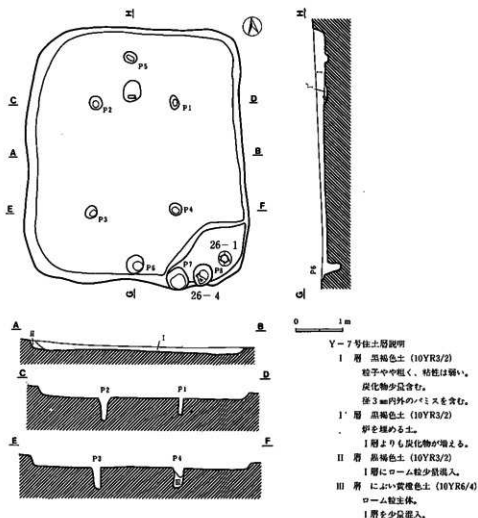
(7) Y-7号住居址

住居址 第25図

本址はC-10グリッドに位置する。重複関係は持たない。

東西4.22m南北5.05mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は20.59㎡を測る。長軸方向はN-7°-Eを指す。

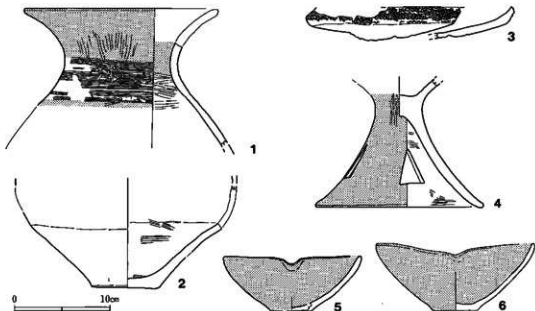
傾斜面にあるため南ほど浅く、壁高は12~25cmを測る。壁体は堅固である。壁溝は持たない。床は全面に貼床が施され、堅固で概ね平坦な面を成すが、南東隅は一段高まりがあり、所謂へ



第25図 Y-7号住居址実測図

ッド状遺構を持つ。貼床の構成土は、Y-5号住居址と同様、粘性の強い黒褐色土にロームを混ぜた混合土を用い、丹念に叩きしめたようだ。

炉は奥側の主柱穴間に設けられる。41×35cmの楕円形を呈する地床炉で南端に円柱状の緑石(河原石)を配置する。床面からは7cm程度浅く掘り窪め、焼土が浅く堆積する底面はおおむね平坦面をなす。

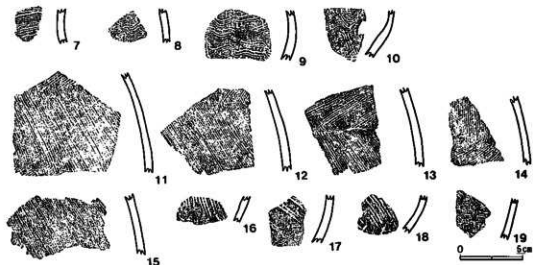


第26図 Y-7号住居址出土土器実測図

第8表 Y-7号住居址出土土器観察表

図号 番号	器種	数量	器形の特徴	文様及び調整	備考
1 (完)	壺 (赤)	20.3 -	口縁部は壁く外反し、胴部は球状を呈する。	外面-全域をハケ調整の後、胴部には横線屈曲状文、下は直線文施す。施文線以外は赤色原料散布、口縁部は緑、胴部は縦方向のヘラミガキ、内面-全域をハケ調整の後、口縁部-一部に赤色原料散布、後、横方向のヘラミガキ、胴部ナシ。	胎土は砂粒を含み、にぶい褐色。(7.5YR7/3) 外面は厚肌滑しい。
2 (完)	壺 (赤)	- 6.6	胴部中位球状、下位は括れる。	外面-ハケ調整の後、口縁部部に横線状文、以下縦方向ヘラミガキ、内面-横方向ヘラミガキ	胎土は粗い砂粒を含み、にぶい黄褐色。(10YR7/2)
3 (破)	壺 (赤)	- -	受口状の口縁部。	外面-ハケ調整の後、口縁部部に横線状文、以下縦方向ヘラミガキ、内面-横方向ヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。(7.5YR8/4)
4 (完)	高杯 (赤)	- 17.4	胴部はラッパ状に開く、中位部部系に三角部通かし持つ。	外面-赤色塗彩、縦方向ヘラミガキ、内面-横方向ナシ。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。(7.5YR8/4)
5 (破)	鉢 (赤)	(14.2) 5.9 (4.7)	体部-口縁部にかけて内傾、矢眼に開く。片口有する。	外面-赤色塗彩、縦方向ヘラミガキ、内面-赤色塗彩、横方向ヘラミガキ。	胎土は砂粒を含み、にぶい褐色。(7.5YR7/4)
6 (破)	鉢 (赤)	(15.4) 7.0 4.7	体部-口縁部にかけて内傾矢眼にひろく。片口有する。	外面-赤色塗彩、縦方向ヘラミガキ、内面-赤色塗彩、横方向ヘラミガキ。	胎土はすなを含み、にぶい黄褐色。(10YR7/3)

### III 遺構と遺物



第27図 Y-7号住居址出土土器拓影図

ピットは8個が検出された。P<sub>1-4</sub>は主柱穴で住居四隅に整然と長方形配置される。P<sub>1</sub>は30×17cmの楕円形、P<sub>2-4</sub>は径25cmの円形柱穴で、深さは33・48・43・40cmを測る。炉の北側に存するP<sub>5</sub>は所謂棟持ち柱で本遺跡ではこの他にY-8号住居址でも見られる。径25cm、深さ8cmを測る。南壁下中央にあるP<sub>6</sub>は入口施設に関連するものであろうか。但し通常見られる対ピットにはならない。ベッド状遺構上にもP<sub>2,3</sub>が掘り込まれている。

覆土は、2層に分層されたが、おおかたは黒褐色土（I層）によって構成され、西壁下にI層に壁が崩壊したと考えられるロームが混じったII層が堆積する。

#### 遺物 第26・27図

覆土中・床面上・ピット内から弥生土器と少量の縄文土器が出土している。総体的に出土量は少ない。出土状況で注目されるのは1と4で、1は下半分を欠く赤彩壺がベッド状遺構上に置かれ、4は同遺構上に掘り込まれたP<sub>7</sub>内に落ち込んでいた。

器種は壺・甕・高坏・鉢などがある。いずれも弥生時代後期の土器の特長を示し、図示したものは6点、拓影は13点である。

壺は赤色塗彩される1と無彩の壺2・3がある。1はラッパ状に開く単純口縁で球状の胴部を持つ。頸部上段に櫛描縷状文、下段に直線文を描く。3は受口状の口縁部を持ちかなりの大型品、2は胴下半が括れる地域固有の壺である。

甕は櫛描波状文が施されるもの(7-10)と斜走文が施される(11-19)2者が認められる。7は頸部の破片で波状文施文の後、おそらく縷状文が廻らされる。8・9は胴部上位、10は胴部下位



の破片である。また斜走文の11~15は同一団体の可能性が高い胴部上位の破片である。16~19は胴部下位の破片である。

鮮やかに赤色塗彩される高坏4は脚部のみで四箇所に三角形の透かしを持つ。外面は丁寧にヘラミガキが施される。

鉢5・6も赤彩品で片口を有する。

#### 時期

以上の本址のベッド状遺構と密接な関係を持つ壺1のプロポーシオン、及び頸部文様における簾状文・直線文の組み合わせは弥生時代終末期に特有である。また、壺2・3のように無彩品が目立つようになるのもこの時期の特長である。その他の遺物も前3者と共件してなら矛盾はない。よって本址はこれらの出土土器をもって弥生時代終末に帰属する竪穴住居と考えてさしつかえない。

### (8) Y-8号住居址

住居址 第28図

本址はC-10グリッドに位置する焼失住居である。重複関係は持たない。

東西4.91m南北5.03mの隅丸方形プランを呈し、床面積は22.75㎡を測る。長軸方向はN-4°-Wを指す。

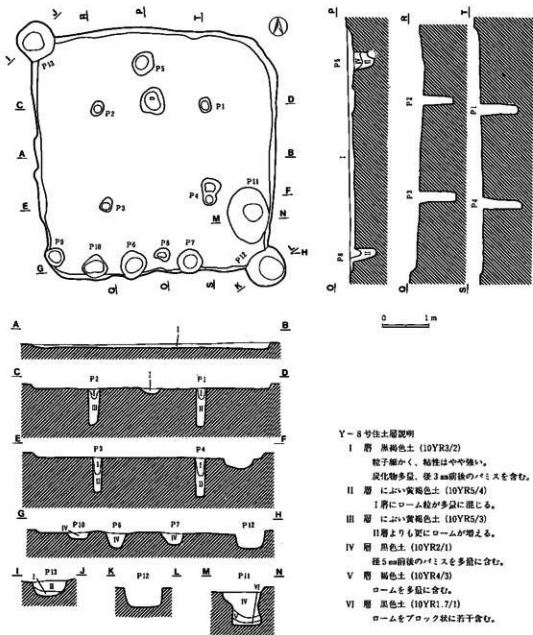
比較的平坦面にあるため確認面からの深さはほぼ均一で、壁高は10cm内外を測る。壁体は堅固である。壁溝は持たない。

床は全面に貼床が施され、堅固で概ね平坦な面を成すが、北壁西半部は若干の高まりを持つ。貼床の構成土は、Y-5号住居址と同様、粘性の強い黒褐色土にロームを混ぜた混合土を用い、丹念に叩きしめたようだ。

炉は奥側の主柱穴間に設けられる。55×48cmの不整楕円形を呈する地床炉である。縁石は確認されなかった。床面からは12cm程度浅く掘り窪められており、底面はおおむね平坦面をなす。焼土の堆積は認められず、底面の焼け込みも見られない。覆土に焼失の際混入したと考えられる炭化物が認められる程度で使用したかさえも疑わしい炉である。

ピットは13個が検出された。P<sub>1</sub>は主柱穴で住居四隅に整然と方形配置される。平面形は様々でP<sub>1</sub>は23×31cmの楕円形、P<sub>2</sub>は23×30cmの楕円形、P<sub>3</sub>は25×30cmの楕円形、P<sub>4</sub>は27×57cmの遠磨形を呈し、北側に一団のテラスを有する。深さはそれぞれ75・64・76・80cmを測り、一様に深い。炉の北側に存するP<sub>5</sub>は所謂棟持ち柱で本遺跡ではこの他にY-7号住居址でも見られる。

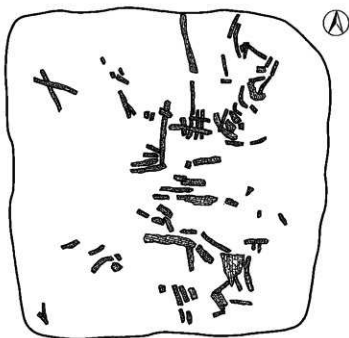
III 遺構と遺物



Y-8号住土層説明

- I 層 黒褐色土 (10YR3/2)  
粒子細かく、粘性はやや強い。  
炭化物多量。径3mm前後のバリスを含む。
- II 層 濃い黄褐色土 (10YR5/4)  
I層にローム粒が多量に混じる。
- III 層 濃い黄褐色土 (10YR5/3)  
II層よりも更にロームが増える。
- IV 層 黒色土 (10YR2/1)  
径5mm前後のバリスを多量に含む。
- V 層 褐色土 (10YR4/3)  
ロームを多量に含む。
- VI 層 黒色土 (10YR1.7/1)  
ロームをブロック状に若干含む。

第28図 Y-8号住居址実測図



第29図 Y-8号住居址炭化材分布図 (1:60)

42×47cmの楕円形を呈し、深さ41cmを測る。南壁下には一列に5個の円形ピットが掘り込まれている。P<sub>6,7</sub>は入口施設に関連するのと考えられる。P<sub>8</sub>はその補助的なものと考えられる。P<sub>9,10</sub>に関してはその役割が明確でない。71cmの深さを持ち東壁下南側にあるP<sub>11</sub>は90×110cmと大きく、貯蔵穴的な役割を果たしたかもしれない。本址誌で注目すべきは北西・南東隅に対角をなして存する張り出しピットP<sub>12,13</sub>の存在である。いずれも径80cm程の円形を呈し、深さは43・32cmを測る。佐久地域では類例を見ない。

覆土は、おおかたは建築材に関連すると思われる黒褐色土（I層10YR4/3）によって構成される。ロームが多量に混じるII・III層は、P<sub>1-4,8</sub>を埋めた土で柱の固定に利用された可能性が高い。黒色土IV層は南壁下にならぶP<sub>6,7,9,10</sub>、貯蔵穴的なP<sub>11</sub>を埋めている。P<sub>11</sub>の底面近くには更にロームの混じるV・VI層も堆積する。

### III 竪溝と遺物



第30図 Y-8号住居址出土土器実測図

第9表 Y-8号住居址出土土器観察表

検出 番号	器種	径 寸	器形の特徴	文様及び調整	備考
1 (完)	壺 (珠)	30.0 - -	口縁部は狭く外反して開く 胴部は球状を呈すると考え られる。	外面-全縁をハケ調整の後、胴部に二段の帯描直線文施す。これを同工具の縦スリットで5等分する。施文部以外は赤色顔料施す。口縁部は縦、胴部は横方向のヘラミ ガキ。内面-全縁をハケ調整の後、口縁部-胴部に横方向のヘラミガキを加える。	胎土は砂粒を含み、濃い褐色 (7.5Y R 7-4)
2 (完)	壺 (珠)	- 6.0	胴部下位は括れる。	外面-全縁をハケ調整の後、胴下部は横方向のヘラミガキ。中位以上は赤色塗彩 内面-ハケ調整。	胎土は砂粒を含み、濃い褐色 (10Y R 7/4)



第31図 Y-8号住居址  
出土土器拓影図

### 遺物 第30・31図

覆土中・床面上・ビット内から弥生土器と少量の縄文土器が出土している。総体的に出土量は非常に少ない。あたかも出火前に片づけられたようで、この状況はY-5号住居址よりも更に顕著と言える。

焼け落ちた炭化材は住居中央東寄りに集中しているが、上屋構造を復元できるだけの残存状態ではない。焼け尽くしてしまったのか、住居を解体した後不要材を焼却したのか判断できかねる。

器種は壺・甕・鉢などがある。いずれも弥生時代後期の土器の特長を示し、図示したものは2点、拓影は1点である。

壺は赤色塗彩される1がある。1はラッパ状に大きく開く単純口縁でやはり張りの強い球状の胴部を持つ。頸部に二段の帯描直線文を廻らせた後、同工具で5箇所に縦スリットを刻み所謂T字文を構成する。2は胴下部が括れる壺で、欠損している胴部上位以上には赤色塗彩が施されている。

甕は帯描斜走文が施される(3)のみで、波状文は認められない。細かい破片のため図示しなかったが、甕の底部片も見られる。

鉢も細片のため図示しなかったが、内湾して開く赤彩品がある。

### 時期

以上の出土土器の特長から本址は弥生時代終末に帰属する住居と考えられる。

## (9) Y-9号住居址

住居址 第32図

本址はC-8グリッドに位置する焼失住居である。重複関係は持たない。

東西4.52m南北5.73mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は24.8㎡を測る。長軸方向はN-8°-Wを指す。

傾斜面に構築されるため、壁は南へ向かう程高さを減じ、南壁は全く残っていない。壁高は北壁中央部で30cm、東壁中央部24cm、西壁中央部で10cmを測る。壁体は堅固である。壁溝は持たない。

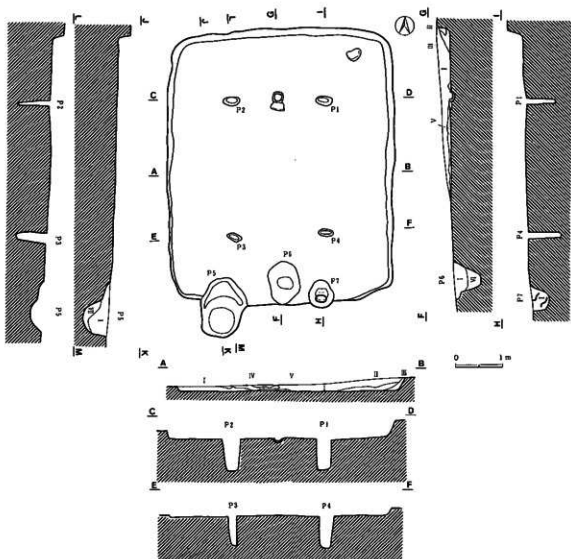
床は全面に貼床が施され、堅固で概ね平坦な面を成すが、北壁西半部は若干の高まりを持つ。貼床の構成土は、Y-5号住居址と同様、粘性の強い黒褐色土にロームを混ぜた混合土を用い、丹念に叩きしめたようだ。

炉は奥側の主柱穴間に設けられる。23×25cmの不整円形を呈し、内部には壺の底部片34-5が埋設された「土器埋設炉」である。本遺跡内では珍しい存在と言える。縁石は南側には扁平な礫を置き、縁石としている。床面からは10cm程度浅く掘り窪められており、底面はやや丸みを帯びる。埋設土器内には焼土の堆積は認められなかったが、底面に密着した埋め土は焼け込んだ痕跡が認められた。

ピットは7個が検出された。P<sub>1-1</sub>は主柱穴で住居四隅に整然と長方形配置される。平面形は長楕円形に統一される。P<sub>1</sub>は35×22cm、P<sub>2</sub>は37×18cm、P<sub>3</sub>は33×18cm、P<sub>4</sub>は33×15cmを測り、深さはそれぞれ61・66・62・69cmを測り、一様に深い。このような形態を持つ柱穴は加工された長方形角材が柱に用いられたとされている。遺跡内では本址が唯一の例である。炉の北側から棟持ち柱は検出されなかった。この他に南壁下に並ぶ大型の3個のピットがある。特にP<sub>5</sub>は壁から張り出している。128×93cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。ピット内北側には一段テラスを持つ。P<sub>6</sub>は92×63cmの楕円形を呈し、深さは56cmを測る。57×55cmの楕円形を呈し、36cmの深さを持つ。P<sub>7</sub>は入口施設に直接関連するとは考え難く、住居覆土と同じI層によって埋められるため、廃絶前までは開口していたと考えられ、貯蔵穴的な役割が強いように思われる。

覆土は、7層からなる。I～III層は竪穴住居のおおかたを埋める黒色土・黒褐色土（Iから10YR3/1, 2/2, 2/1）でそれぞれにバミスを含む。IV・V層は住居焼失によって生じたものでIV層は焼土と炭化材、V層は炭化材主体層である。ピット内にあるVI層黒色土は炭化材を少量だが含むため、住居焼失直前まで開口していた可能性が強い。VII層褐色土はロームを均一に含むため、人為的に埋められたと考えられる。

III 遺構と遺物



Y-9号住土層説明

I 層 黒褐色土 (10YR3/1)

粒子やや粗く、粘性はやや強い。  
径5-20mm前後のバミスを多量に含む。

II 層 によく黄褐色土 (10YR5/4)

粒子細かく、粘性はやや強い。  
径5-20mm前後のバミスを含む。

III 層 によく黄褐色土 (10YR5/3)

粒子細かく、粘性は強い。  
径2mm前後とこぶし大のバミスを含む。

IV 層 明褐色土 (7.5YR5/6)

焼土と炭化材。

V 層 黒色土 (10YR1.7/1)

炭化材主体。

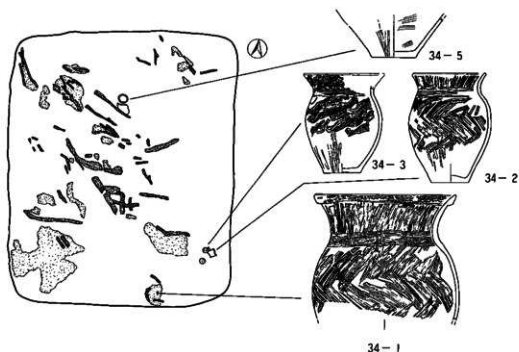
VI 層 黒色土 (10YR2/1)

炭化材を径2mmのバミスを少量含む。

VII 層 褐色土 (10YR4/3)

ロームを均一に大量に含む。

第32図 Y-9号住層址実測図



第33図 Y-9号住居址炭化材分布図(1:60)

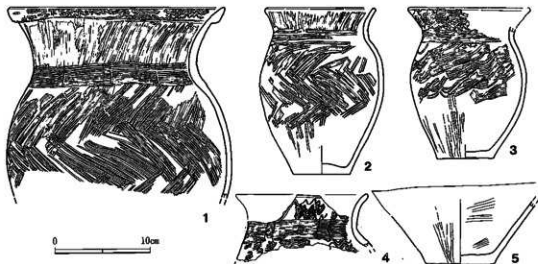
## 遺物 第34・35図

覆土中・床面上・ピット内から弥生土器と少量の縄文土器が出土している。総体的に出土量は非常に少ない。あたかも出火前に片づけられたようで、この状況はY-8号住居址と一致する。

焼け落ちた炭化材は住居中央西寄りに集中し、略東西方向を向くものが多いが、上屋構造を復元できるだけの残存状態ではない(第33図)。焼け尽くしてしまったのか、住居を解体した後不要材を焼却したのか判断できかねる。

器種は壺・甕・高坏などがある。いずれも弥生時代後期の土器の特長を示し、図示したものは5点、拓影は3点である。壺は括れる胴部下半のみの1がある。上半を欠くため赤色塗彩の有無についてはわからない。甕は櫛櫛斜走文が施される1・2・8と、波状文が施される3・4・6・7がある。両文様とも口縁部から胴部への施文を基本とする。口縁部は1のみ貼り付け口縁、他は単純口縁で、胴部は1のみ大きく膨らみ他は軽く膨らむ。

図示しなかったが高坏は赤色塗彩される口縁部がある。



第34図 Y-9号住居址出土土器実測図

第10表 Y-9号住居址出土土器観察表

標本番号	器種	法量	器影の特徴	文様及び調整	備考
1 (泥)	甕 (俵)	22.2 — —	口縁部は強く外反し、肩部 張り付け口縁。胴部は頸部 綫を呈する。	外面-口縁-胴部に四段の帯縞斜走文を組み合わせた縦羽状縞。更に胴部に二道止め 縞状文を加える。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミガキ、胴部縦方向のヘラミガキ。	粘土は砂粒を含み、濃い黄褐色 (7.5YR 6/3) 二次焼成顕著。
2 (泥)	甕 (俵)	11.2 17.5 6.2	口縁部は強く直立尖峰に外 反し、胴部は中位で張る。	外面-口縁-胴部に四段の帯縞斜走文を組み合わせた縦羽状縞。更に胴部に直線文を 加える。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミガキ、胴部縦方向のヘラミガキ。	粘土は砂粒を含み、濃い黄褐色 (7.5YR 7/3) 二次焼成顕著。
3 (泥)	甕 (俵)	12.3 16.0 5.9	口縁部は割合強く外反する。 胴部は中位で強く張る。	外面-口縁-胴部に上下がりの帯縞斜走文を基本的には上から下へ通し、更に胴部に 直線文を加える。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミガキ、胴部縦方向のヘラミガキ。	粘土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (10YR 8/4) 二次焼成顕著。
4 (泥)	甕 (俵)	(13.8) — —	口縁部は外反する。	外面-口縁-胴部に帯縞斜走文を基本的には上から下へ通し、胴部に二道止めの縞状文 を加える。 内面-口縁部-胴部に横方向のヘラミガキ。	粘土は砂粒を含み、灰黄褐色。 (10YR 5/2) 二次焼成顕著。
5 (泥)	甕 (俵)	— — 2.0	胴部下位は折れる。	外面-縦方向のヘラミガキ 内面-ナデ。磨滅甚しい。	粘土は砂粒を含み、濃い黄褐色。 (10YR 7/3) 二次焼成顕著。



第35図 Y-9号住居址出土土器拓影図

時期

以上の出土遺物のうち、甕1は弥生時代終末期の象徴的な形態を示す。他の遺物との共伴関係も何ら矛盾なく、これらの遺物をもって本址を弥生時代終末に位置付ける。



## (10) Y-10号住居址

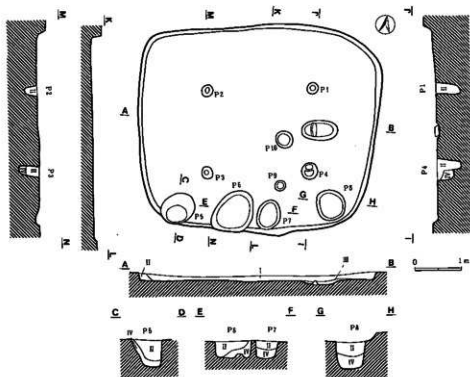
住居址 第36図

本址はB-8グリッドに位置する。重複関係は持たない。

東西4.87m南北4.24mの隅丸長方形プランを呈し、床面積は18.75㎡を測る。長軸方向はN-82°-Eを指す。

南傾斜面に構築されるため、壁は南へ向かう程高さを減じ、南壁はわずかに残る程度である。壁高は北壁中央部で21cm、東壁中央部で15cm、西壁中央部で15cm、南壁で6cmを測る。壁体は堅固である。壁溝は持たない。

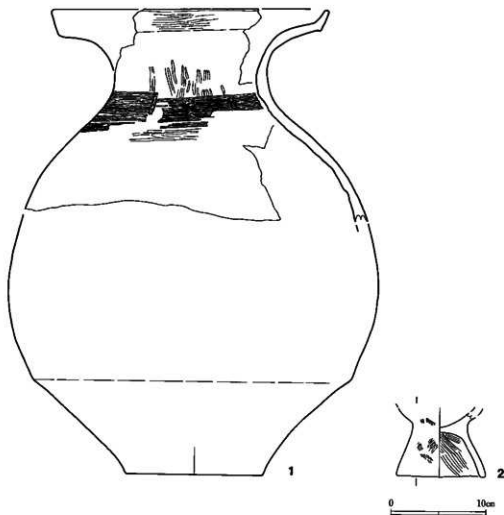
床は全面に貼床が施され、堅固で概ね平坦な面を成すが、北壁西半部は若干の高まりを持つ。貼床の構成土は、Y-5号住居址と同様、粘性の強い黒褐色土にロームを混ぜた混合土を用い、



## Y-10号住居址層説明

- |  |   |
|--|---|
| <p>I 層 黒褐色土 (10YR2/2)<br/>           粒子やや粗く、粘性はやや強い。<br/>           径5mm前後のハミスを少量含む。</p> <p>II 層 黒色土 (10YR2/1)<br/>           粒子細かく、粘性はやや強い。<br/>           径5mm前後のハミスを微量含む。</p> | <p>III 層 黒色土 (10YR1.7/1)<br/>           粒子細かいが、粘性はない。炭化粒主体。<br/>           径5mm前後のハミスを少量含む。</p> <p>IV 層 褐色土 (10YR4/3)<br/>           ローム粒、砂主体。I層若干含む。</p> |
|--|---|

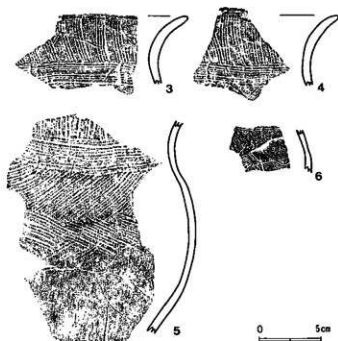
第36図 Y-10号住居址実測図



第37図 Y-10号住居址出土土器実測図

第II表 Y-10号住居址出土土器観察表

検出 番号	部名	容量	器形の特徴	文 飾 及 び 調 整	備 考
1 (個)	甕 (鉢)	(25.5) 151.5	胴部は短く幅狭い。口縁部は受口状。胴部は縁状を列し、下位は括れる。	外面-全域をハケ調整の後、胴部に黒褐色文、首縁文飾文。更に胴-口縁部に縦方向、胴部に横方向のヘラミダギ。 内部-全域をハケ調整の後、口縁部-胴部に横方向のヘラミダギを加える。	胎土は砂粒を含み、淡黄褐色。 (7.5Y 6/3)
2 (個)	山打壺 (鉢)	- (1.6)	台座「ハ」の字状に開く。	外面-ハケ調整の後、ナア。 内部-ハケ調整。	胎土は砂粒を含み、濃い褐色。 (7.5Y 6/3)



第38図 Y-10号住居址出土土器拓影図

それぞれ52・27・44・50cmを測る。また、 $P_4$ は南側に一段のテラスをもつ。炉の東側から棟持ち柱は検出されなかった。この他に南壁下に並ぶ大型の4個のビットがある。 $P_5$ は72×61cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。 $P_6$ は径84cm前後の不整形円形を呈し、深さは35cmを測る。底面には一部突出がある。 $P_7$ は62×46cmの楕円形を呈し、36cmの深さを持つ。 $P_8$ は64×58cmの楕円形を呈し、55cmの深さを持つ。 $P_9$ は入口施設に直接関連するとは考え難く、住居覆土に近似するII層によって埋められるため、廃絶前までは開口していたと考えられ、貯蔵穴的な役割が強いように思われる。 $P_{10}$ 西側にある $P_{10}$ は径34・21cmの円形ビットだが、性格についてはわからない。

覆土は、4層からなるが住居を埋めたのはI層黒褐色土である。II層は前述したようにI層に似る黒色土である。本住居のおおたのビットを埋める。III層は炉の覆土、IV層はローム・砂が主体でビット内下層部分に当たる。

## 遺物 第37・38図

覆土中・床面上・ビット内から弥生土器と少量の縄文土器が出土している。総体的に出土量は非常に少ない。壺1は $P_5$ 内からバラバラに破損した状況で出土した。

器種は壺・甕・台付甕・鉢などがある。いずれも弥生時代後期の土器の特長を示し、図示した

丹念に叩きしめたようだ。

炉は東側の主柱穴間に設けられる。78×42cmの長楕円形を呈する地床炉で、西側には円柱状の礎を置き、縁石としている。床面からは7cm程度浅く掘り窪められており、底面はおおむね平坦である。焼土の堆積は認められなかったが、底面は焼け込んだ痕跡が認められた。また、炉内には炭化粒子(III層)が大量に埋まっていた。

ビットは10個が検出された。

$P_{1-4}$ は主柱穴で住居四隅に整然と長方形配置される。平面形は円形に統一される。径は $P_{1-3}$ が25cm、 $P_4$ が35cmで、深さはそ

### III 遺構と遺物

ものは2点、拓影は4点である。

壺は胴部中位以下を欠くが、おそらく胴部下半が括れると考えられる1がある。口縁部は強く大きく外反し、端部で受口状に立ち上がり、胴部は球状に大きく膨らむ。文様は受口部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文・直線文を廻らせ、赤色塗彩は施されない。細片のため図示しなかったが、同じ受口部が無文の破片もある。

甕は櫛描斜走文が施される1～3と、波状文が施される4がある。1～3は同一固体である。1～3は口縁部から胴部への施文を基本とし、最後に頸部に二連止め簾状文を廻らせている。4も波状文施文の後、簾状文を廻らせる。図示しなかったが鉢は赤色塗彩される口縁部がある。

### 時 期

以上の出土遺物のうち、壺1は弥生時代終末期の象徴的な形態を示す。他の遺物との共存関係も何ら矛盾なく、これらの遺物をもって本址を弥生時代終末に位置付ける。

## (II) 弥生住居内出土の縄文土器

### 遺 物 第39図

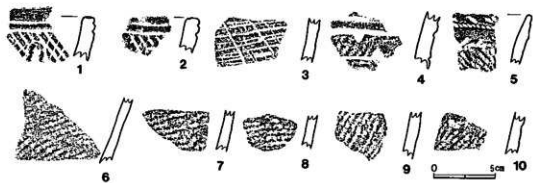
弥生時代の竪穴住居址内（Y7～10）から少量ながら縄文土器が出土した。これらを取り纏めて図示したのが第39図である。

### 縄文時代中期初頭と考えられる土器群

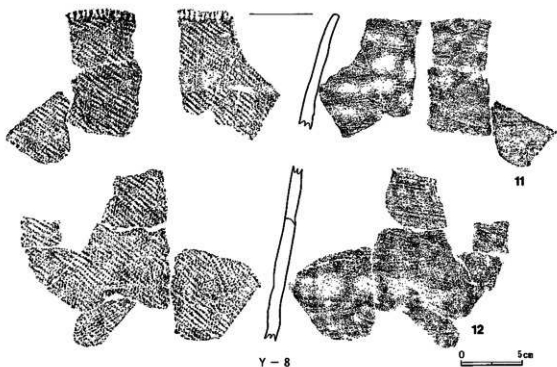
1～3・6～10及び14が該当する。五領ケ台式の集合沈線文系土器で1～3、14は口縁部、6～10は胴部の縄文施文破片である。

### 縄文時代前期と考えられる土器群

縄文時代前期初頭と考えられる5、11・12と前半（関山式併行）と考えられる15・16がある。5の原体は単節R Lで口縁部直下には同一原体の側面圧痕、口唇部には刻みを施す。口縁部下の突起は縄文を転がした後に、刻みを入れ、刻みと刻みの間に凸をめくり上げ、小波状にしたものかもしれない。11・12は同一個体で、口縁部の刻みは右回りに施文される。表面の口縁～胴部に充填される縄文の原体はR L、裏面には指頭痕及び原体不明の条痕調整が施される。素地には繊維及び雲母片が多量に混入する。信州新町お伴平遺跡15号住居址に類似品があり、時期については前期初頭か条痕調整の存在から早期末とも考えられる。15・16は関山式に相当すると考えられる含繊維土器である。



Y-7



Y-8



第39図 弥生住居内出土の縄文土器

## 2 平安時代の竪穴住居址

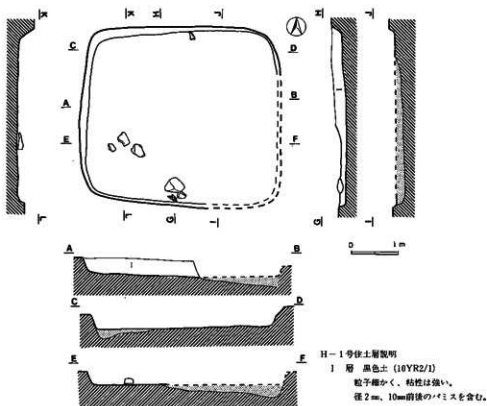
### (1) H-1号住居址

住居址 第40図

本址はC-3グリッドにおいて検出された。

南東側が自然流出しているため、全容不明であるが、東西3.96m南北3.64mの隅丸方形を呈すると推定される。床面積も推定で13.65㎡を測り、長軸の方位はN-82°-Eを指す。

床面は、地山ローム層を平坦に削って構築されており、貼り床を施した痕跡は見られない。また、平坦化した後、特に叩きしめたり、踏み締めた状況もみられず、脆弱である。



第40図 H-1号住居址実測図



第41図 H-1号住居址出土土器実測図

第12表 H-1号住居址出土土器観察表

種別 番号	種類	法量	器形の特徴	調査	備考
1	高台付 (甕)	15.3 5.5 7.6	胴部内凹、口縁部縁く外反、底部高台付り付付。	内外面ロクロナデ。後、内面黒色処理。及び丁寧なヘラミガキ、底部高台付りの後ナデ。	胎土は砂粒を含み、にぶい褐色。 (7.5Y7/3)

壁は緩い傾斜をもって立ち上がり、残存壁高12~30cmを測る。壁溝はもたない。

ビッドは検出されなかった。

また、竈も付帯していなかった。

覆土は粘性の強い黒色土層(10YR2/1)単層で、2mm前後と1cm前後のバミスを含む。

以上、本住居址は床面の状況、主柱穴・火処の欠如、微量の遺物など生活臭が薄いことが指摘できる。

#### 遺物 第41図

覆土中および床面上から土師器が出土している。

器種は甕と高台付杯・鉢がある。細かい破片が多く図示したものは1点のみであるが、ほとんどが平安時代9世紀後半の特長を示す。

甕は器内が薄く、ヘラズリ痕が顕著な所謂「武蔵」甕の一個体分と考えられる胴部片が出土している。

高台付杯はほぼ完形に近い1がある。内面はロクロ調整の後、黒色処理され、ていねいにヘラミガキされている。この他に図示できなかった細片もいくつかある。

鉢は内面が黒色処理された後、ていねいなヘラミガキが施される細片がある。

#### 時期

本址は黒色処理の後、ていねいなヘラミガキが施される高台付杯、及びこれに共伴する「武蔵」甕の存在をもって、平安時代・9世紀後半に位置付けられる。

### 3 土 坑

#### 遺 構 第42～44図

本遺跡では19基の土坑（穴）が検出された。このうち遺物が検出されたのはD-1号土坑のみで時期判定・機能推定する材料に乏しい。

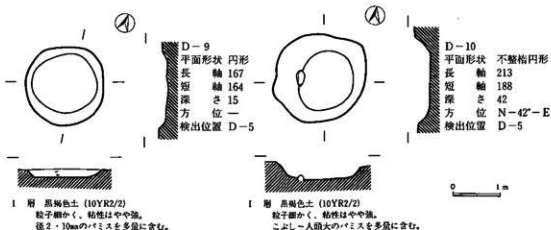
規模・形態・検出位置は第42～44図中に記してある。

位置関係を見るとD-4グリッドから検出されたD-1～6号土坑、D-5グリッドから検出されたD-7～10号土坑、Y-9号住居址の西、B-9グリッドから検出されたD-11号土坑、C・D-11・12グリッドから検出されたD-12～19号土坑と、D-11号を除き、3群にグループリングすることができる。このうち、D-1～6号土坑と7～10号土坑は一群を成すY-1～5号竪穴住居のまとまりの北東方向に隣接する。また、D-12～19号土坑はY-7～10号竪穴住居のまとまりの南側に群在する。住居と重複するものはなく、集落全体の北端と南端に偏在するその位置関係は弥生時代の竪穴住居群に付随しているもののようにも思える。

本遺跡は主に弥生時代終末に開かれた農耕集落であるが、高床倉庫等貯蔵施設に関する遺構に乏しい状況にある。竪穴住居内における貯蔵も考慮しなければならないが、集落に隣接する土坑群は貯蔵目的で掘削されたのかもしれない。

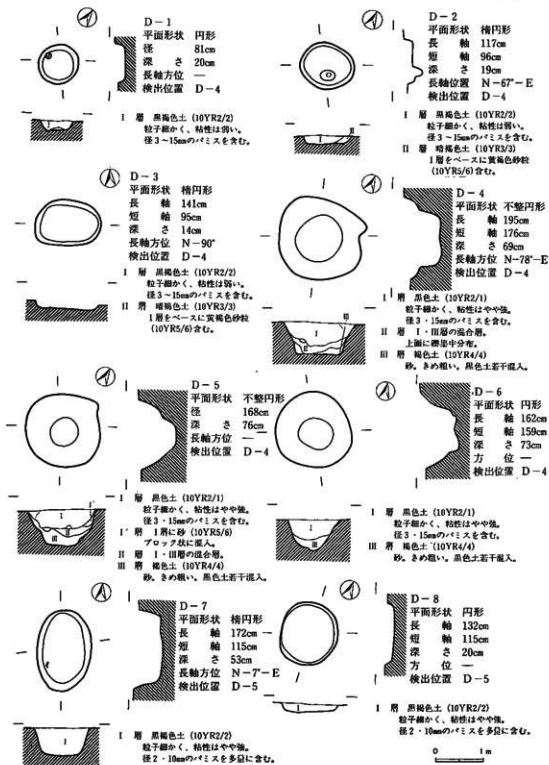
#### 遺 物

前述のように土坑内からはほとんど遺物が出土していない。D-1号土坑から弥生時代後期の赤色塗彩色される壺の胴部片と、甕の底部片が出土している。



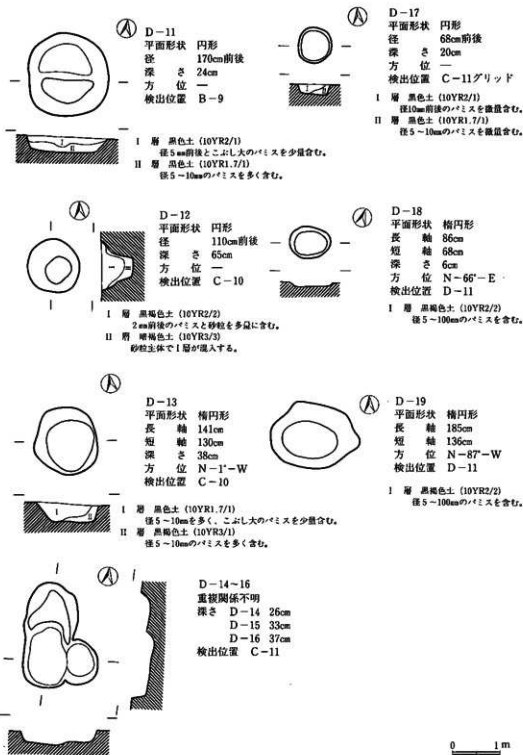
第42図 D-9・10号土坑実測図





第43図 D-1~8号土坑実測図

田 遺構と遺物



第44図 D-11~19号土坑実測図

## 4 溝状遺構

## (1) M-1号溝状遺構

## 遺構 第45図

本址は、BCD-4グリッドに位置する。重複関係は持たない。

検出長34.50mの東西方向に直線的に伸びる溝で、幅は上部に当たる西側で1.7m、中央部で1.2m、東側で1.5m内外を計測する。西側（上部）と東側（下部）では確認面で1m程の高低差がある。深さは中央部までは30~48cmと浅いが東側では底面に抉り取るように堆積した砂層（IV層）が厚く70cmとかなり深くなる。これは降水等による若干の水流によって生じたものと考えられる。従って本溝は本格的な河川ではない。

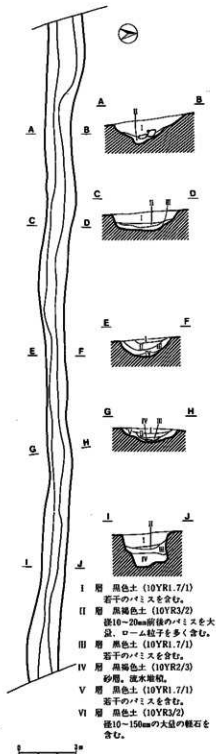
## 遺物 第46図

縄文前期の土器と土師器内耳土器と考えられる破片が出土したのみで詳細な時期判定はできない。縄文土器1~3は奥野麦生氏の黒浜Ⅱ式に当たるコンパス文系統の土器で関東外へも分布が広がる土器である。

## (2) M-2~5号溝状遺構

本遺跡は江戸時代以降に掘削されたと考えられる用水路によって南北に分断され、南東側にある塚田遺跡との境にも用水路が蛇行している。細田遺跡I・II区の各南側に樹枝状に掘削されたM-1~5は前述の用水路に連結しており、一時期引水に利用された可能性が高い。

M-2内には混入したと考えられる弥生土器が出土した。第46図に示したので参照されたい。



第45図 M-1号溝状遺構

## 5 その他の出土遺物

本遺跡は北側のI区中央部に黒色土堆積の包含層を持つ。この中から縄文時代前期の良好な資料第46図1が出土した。その他、表面・及び溝状遺構内からは縄文土器・石器、弥生土器、須恵器、土師器皿・双耳土器の細片が出土している。

### 土器

1は縄文時代前期中葉の時期を与えることができる。全体の文様構成は胴上半がRL、下半はLの羽状構成をとるものかなり雑な施文である。剥落の著しい繊維土器であることもあいまって原体の施文幅、単位等はかなり不明瞭で図中では肉眼でわかる範囲のみ表記してある。同様な破片は細田塚古墳でも見られる。

2～5は奥野麦生氏の黒浜II式に当たる。埼玉県下毛遺跡に良好な資料が見られるコンパス文系統の土器で、関東地方外へ分布が広がる。長野県では茅野市阿久遺跡で出土している。関西では若干器形が異なるもののコンパス文の文様帯は岐阜県堂ノ上遺跡、富山県南太閤山I遺跡で見られる。6～7はM-2号溝状遺構から出土した弥生時代後期の甕の破片である。

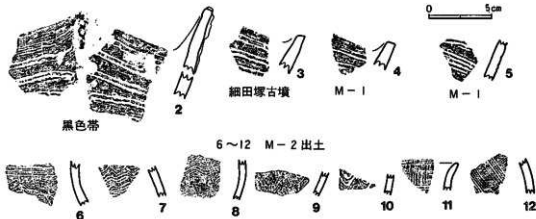
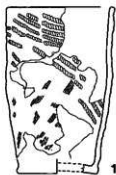
### 石器

第47図1は、流紋岩製の磨製石斧である。2～3は打製石斧でいずれも安山岩製である。2は基部を、3は刃部を欠損する。

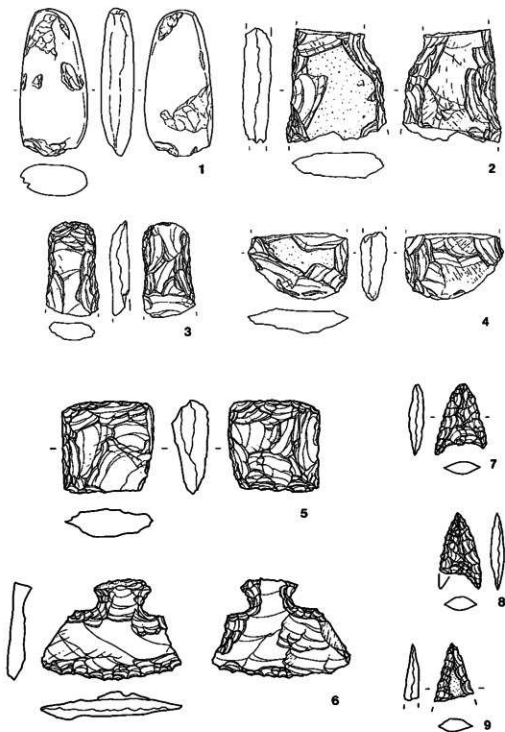
4は楔形石器で香坂のガラス質安山岩で製作されている。

5は石匙でチャート製である。

6～8はやはりチャート製の打製石鏃である。

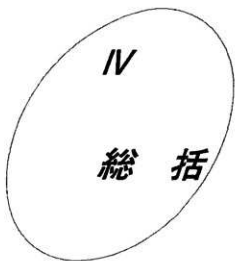


第46図 住居址以外から出土した土器



第47図 細田遺跡出土石器実測図









# 1 細田遺跡出土弥生土器の位置付け

## (1) はじめに

前項で詳述してきた竪穴住居址（Y-1～9号住居址）からは総体として少量ながらも弥生時代後期の土器群が出土した。これらは全容を把握できるものに乏しいが、各々の形態・文様の特長を検討するとおおむね、同一時期と判断されるものである。また、一軒の住居から当時の土器組成を網羅する一括資料の出土にも恵まれないものの、集落総体として器種別に取り纏めてみれば（第47～49図）該期の比較的良好な比較材料となり得る。出土遺物の一括性の乏しき及び形態の全容把握が困難なことなど考古学的諸方法の必要十分条件を満たさず、型式学のみによ換する資料操作となることは否定できないが、ここではまず、従来編年観を援用して本遺跡から出土した弥生土器群に分析を加え、明確な時間的位置付けを与えた上で、集落構造の分析を行うことにしたい。

佐久地方の弥生土器は、中期後半から後期に至るまで一部に空白があるもの、おおむね連続とした型式変化が追えるものであり、後期に至ると研究史上同一視されてきた千曲川流域の地域型式「箱清水式土器」文化圏の中でも佐久地域独自の展開がなされるものであることが指摘されている。但し、これはあくまで一個人の独創に寄るもので、無批判であることは許されない。今後更に批判検討を加えて当地の弥生土器編年を強固なものにして行かねばならないことは言うまでもない。とは言え、当遺跡の時間的に限定された資料は従来の編年を覆す材料がなく、あくまで補足的な役割を果たすものであると判断する。従って、ここでは今までの編年観を踏襲して、他遺跡との比較を踏まえながら分析を加えて行く。

## (2) 出土土器の分類

器種は壺、甕、台付甕、深鉢、高坏、鉢がある。

壺 在地の発展系譜上にある無彩のAと赤色塗彩されるB、在地器種が外来要素の進入によって変容したと考えられるC、在地の発展系譜上にない全くの外来要素Dがある。

形態-A Bとも胴部形態が一樣に大きく膨らみ球状を呈す点は一致する。口縁部は受口状を呈するものと、単純口縁がある。胴下位が判明するものは少ないが、大概括れるものと判断される。

Cの1は算盤玉状の胴部から口縁部が直線的に開くと考えられる形態で在地の発

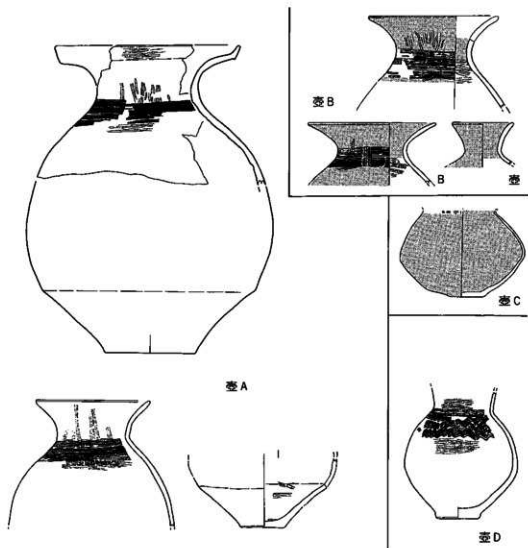
展系譜ではあり得ない。Cの2も同様である。

Dは群馬県樽式土器の系統下にある。

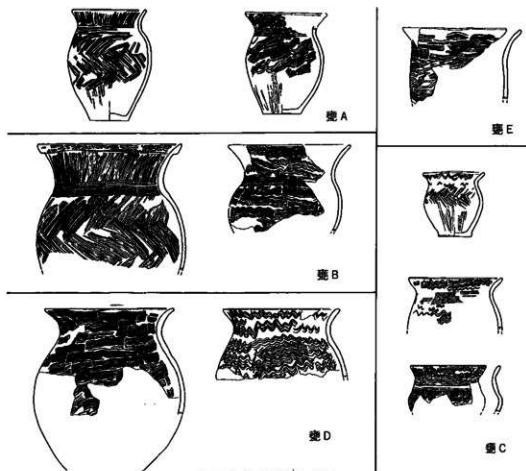
文様—A Bは頸部にのみ施文される。帯幅簾状文と直線文の組み合わせで構成されるものと、所謂T字文が施されるものがある。

Cの1は頸部に簾状文を施す点は在地色を示す。器表面全体に赤色塗彩する点も在地色の影響と考えられるが、発色は異なる。Cの2は無文である。

Dは頸部簾状文、胴部波状文の文様構成で群馬県の樽式土器の系譜を引く。おそらく佐久地方初見である。器表面を丹念にヘラミガキする点が樽式土器と異なる。



第48図 弥生土器壺の分類



第49図 弥生土器壺の分類

壺 在地系のもので占められる。文様は口縁部から胴部中位まで櫛描波状文が施されるものと斜走文が施されるもの2種があるが、文様差によって形態差は生じないため形態主に5分類する。

形態—頸部は鋭く屈曲し、口縁部は長く外反するA、Aよりも胴部の張りが強く、球状に膨らむB、口縁部が短く強く外反し、胴部が軽く膨らむ小型品を中心としたC、口縁部が短く外反し、胴部が球状に大きく膨らむ大型品を中心としたD、口縁部が長く外反し、胴部が寸胴なEなどがある。口縁部は大概是単純口縁だが、壺Bに見られるような貼り付け口縁もある。

文様—前述のように口縁部から胴部中位まで櫛描波状文か斜走文を充填することを基本とする。Cの一部には両者が混在するものもある。A Bには頸部に櫛描簾状文(二連止めが多い)を廻らせることが多いが、D Eは簾状文がないものが多い。Cは

簾状文があるものとないもの両者がある。

**深鉢** 全容を知り得ないが甕Aの形態と近似し、外面及び口縁部内面は赤色塗彩される。

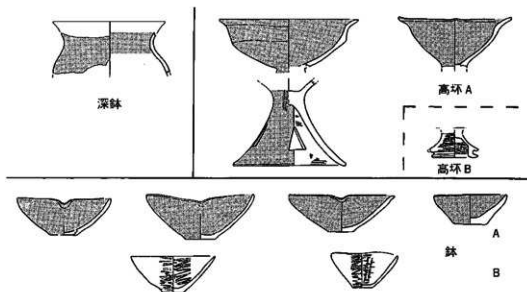
**高杯** 杯部下位で屈曲して腹を持ち直した後、口縁部が強く外反するAと甕を持つ脚部のBがある。Aには三角形透かしを持つ脚部もある。Aは赤彩品、Bは無彩である。

**鉢** 赤彩品Aと無彩のBがある。片口の有無はあるが双方形態的に大差なく、内湾して開く。

### (3) ま と め

在来種の壺A Bは形態では球状に大きく張る胴部および受口状口縁部の存在、頸部文様ではT字文に加え、簾状文・直線文の存在などの諸特長を持つ。前代の所謂箱清水式の典型を示す時期の壺はこれに比してスリムで、受口口縁もほとんどない。また、文様もT字文に統一され、赤色塗彩されるのが一般的で無彩品は少ない。これらと比較すると、細田遺跡の在来種の壺は前代からの型式変化が明確である。

甕はA～Eと形態差が著しい。前代の甕は大中型品はA、小型品はCにはほぼ形態統一される。これに比して当遺跡の甕は胴部の膨らみが大きく球状を呈するBDが加わる。壺同様に型式変化は自明である。また、甕Bに見られるような貼り付け口縁の存在も当該期の特長である。



第50図 弥生土器深鉢、高杯、鉢の分類

文様は横溝波状文、斜走文の2者がおおむね同比率で存在する。變Cに見られるように一つの土器に両者を施文するものもある。施文順序は斜状文は4段構成が多く、口縁部一周→頸部→胴部上位一周→胴部中位一周→胴部下位一周の順序で施文される。波状文は帯の断絶箇所が一致するものに関しては、器表面を基本的に5分割し上(口縁部)から下(胴部)へ順次施文するもの(21-7、Y-5住)と、一場面では上から下へ、次の場面では下から上へ順次施文するもの(21-6、Y-5住)が認められる。さらに前述のような縦区画でなく、一帯の帯を断絶を繰り返しながら仕上げて行くもの(15-2、Y-3住)も少数ある。また、變Eのように施文順序がわからないような加減な乱れた施文をするものもあり、頸部へ最後に鬚状文を施す共通性を除いて、波状文の施文パターンは一定していない。

以上に述べてきた形態・文様すべての要素が過去に弥生時代終末に位置付けられた土器群と符号する。<sup>(2)</sup>

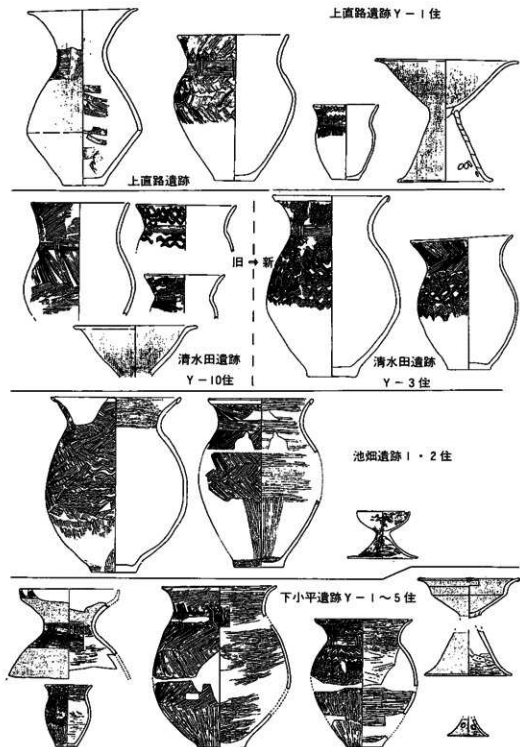
ところで斜走文の佐久平における独自の位置付けに至っている経緯についてももう一度整理しておきたい。斜走文はかつて箱清水式に先行する吉田式の主文様であるため、箱清水式に認められる場合はその中でも古段階に位置付けるといふ認識が一般的であった。事実近年発表された善光寺平を中心とする編年観では箱清水式の段階(V-3期以降)に至ると斜走文は全く姿を消している。ところが、佐久平では特に千曲川右岸地域の諸遺跡で弥生後半～終末ばかりか、古墳時代に入っても斜走文の存在を示す事例が多出した。例えば佐久市上直路遺跡では箱清水式の典型と考えられる壺とともに斜走文施文の甕が出土した。<sup>(4)</sup>更に同市清水田遺跡では上直路遺跡と同段階と考えられる住居群を切る住居から斜走文の甕が出土した。清水田遺跡の甕と近似した型式の甕は同市下小平・池畑遺跡でも認められ、これらに共伴する土器群中には古墳時代の始まりを示唆する東海系小形高坏等も含む外来系土器が認められた。また、これらに後続する型式変化を示す土器群と多くの東海系を始めとする外来系土器を出土した佐久市瀧の峯2号墳や小諸市久保田・和田原遺跡でも斜走文は健在である。以上のような経緯から佐久平では斜走文が古墳時代まで残存することが認識されるようになった。

深鉢は後期中頃以降顕在化する器種と考えられるが、存続期間全体を通じて大きな変化は見られない。

高坏Aは佐久地方では後期終末に出現を見るものである。善光寺平ではいち早く後期中頃に成立する。高坏Bは類例を見ない珍品である。

鉢はA Bとも中期後半以降大きな型式変化を遂げない保守的な器種である。

以上を総括すると、細田遺跡から出土した弥生時代後期の土器群は終末段階に位置付けることができる。但し、これら当該期の土器群は同型式と考えられる上山町御屋敷遺跡Y-4号住、



第51図 斜走文が残る甕の例 (S=1:8)

上田市西光坊遺跡8号住の土器群にA系統B類のS字甕が共伴することなどから、東海地方の元屋敷式古段階、畿内地方の纏向3式などとの併行関係を想定し、古墳時代に位置付ける考えもある。併行関係については筆者も異論ないところで、細田遺跡出土土器が形成された頃、日本列島の趨勢は古墳社会への統一が始まっていることも認める。しかしながら、佐久地域のみならず千曲川流域にあっては土器において若干の東海色・越後色を被りながらもまだまだ在地色は濃厚なのである。私は地域編年を尊重する立場からこのような土器群を古墳時代の土器、ひいては土師器と呼ぶことにはためらいを感じざるを得ない。千曲川流域にあっては土器・集落・竪穴住居形態いずれをとっても地域に育まれた弥生社会が継続していたと見るのである。したがって、ここでは敢て弥生時代終末に位置付けておく。この次の段階の土器が生成される頃になると、松本では弘法山古墳、佐久平では瀬の峯2号墳など墳形・土器両面に東海色を強く被った前方後方墳、および前方後方型の墳墓が成立する。同時期の集落出土の土器も伝統色を強く残しながらも変容著しく、東海色が濃厚となる。私はこの時期からを千曲川流域における古墳社会の始まりと規定したいと思う。



第52図 古墳時代にも残る斜走文

## 2 細田遺跡の弥生集落

### (1) はじめに

前項で細田遺跡出土土器の分析を行った結果、概ね、同一時期に取り纏められ、当地域の弥生時代終末、日本列島下の趨勢では古墳の築造が始まる時期に位置付けられることが明らかになった。このような国内情勢の中で高冷地に忽然と姿を現した細田遺跡の弥生集落の意味を考えてみようと思う。

### (2) 細田遺跡弥生集落の沿革

細田遺跡は浅間南麓の裾野、標高810m内外の細尾根上に弥生時代終末期にいたり営まれた集落である。今回の発掘ではほぼ全域が調査された希少な集落事例で、佐久平では最高地点の弥生集落の発見例である。当遺跡の弥生集落は弥生終末期に集落形成した後は継続して営まれることがなく、南側直下に広がる一段低い沖積地に立地する6軒の竪穴住居址が検出された塚田遺跡へ古墳時代初頭段階では移住したようだ。

生産域は塚田遺跡の南方下段にある通称「ハルキ沢」と呼ばれる谷地にあった可能性が高い。なぜならそこは現在御代田町で冷害を被らない一等水田地帯だからである。今回の発掘調査ではこの谷地から明確な水田址を発見することはできなかった。ただし、確認トレンチの一部から現水田よりも下層から時期は不明確であるものの古い水田層と考えられる土層が発見された。現在分析中であり、塚田遺跡の報告で生産域の想定がなされるかもしれない。現状では肯定材料に乏しいものの、ここでは前述の立地状況から見て、細田遺跡は稲作農耕を指向して成立した集落と考えておきたい。

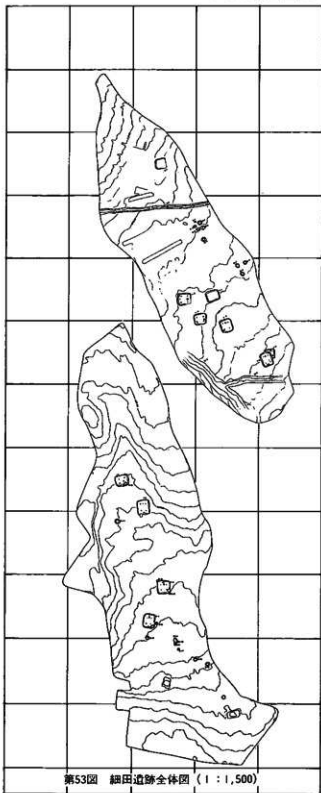
規模 総数で10軒検出され、出土した土器様相に差異は見られない。しかし、一例重複があるため、同時併存の可能性のあるのはY-6住を除く9軒である。但し、これも短絡的に一斉に建てられたと見做すにはやや難がある。何故ならY-3住貼床内出土片とY-5住P<sub>0</sub>内出土の甕片22-10には接合関係が認められるからだ。Y-3住の床面構築時に、仮にY-5住居住者が同土器を保有していたとすれば、Y-3住の構築時期はY-5住よりも新しいことになる。もうひとつの見方はY-5住P<sub>0</sub>内出土片が同住居の周堤内に存在した場合だ。第19図を見ると明らかに、P<sub>0</sub>は南壁下に存在し、周堤が崩壊したととれる堆積状況を示すⅢ層に覆われている。Y-5住出土片が周堤内に存在したとすれば、Y-3住との構築時期はほぼ同時と言うことになる。いずれにしてもこの集落が段階的に軒数が増えていったものであるのか、一斉に構築された



のか、いまの材料では証明する手だてがない。但し、後述するようにこの集落は一斉に放棄された状況を示しており、一応同時期に9軒存在した集落と仮定して考察を進める。

北側に5軒（Y-1～5号住居址、以下このまとまりを北群と呼ぶ）、南側に4軒（Y-7～10号住居址、以下このまとまりを南群と呼ぶ）のまとまりがみられる。ただし、Y-1号住居址は上屋がかかっていたか疑念があり、北群の実数は4軒と見た方が良くかもしれない。第13表に記したように南北群共に住居の長軸方位は不揃いで、北群では概ね東西方向を向くY-1・3・4号住居址と、南北方向を向くY-2・5号住居址がある。南群では東西方向を向くのはY-10号住居址のみで、Y-7～9号住居址は南北方向を向く。以上の状況から見て細田遺跡では住居の長軸方位によって同時期性が問えないと言える。

各竪穴住居の形態は概ね千曲川流域の弥生後期住居に一般的な隅丸長方形基調で、規模は第13表に記した通りである。床面積は20㎡前後の範囲に落ち着いており、突出して大きいか、小さい住居はない。



第53図 細田遺跡全体図（1：1,500）

住居の属性 柱穴配置は柱穴があるものに関してはすべて4本整然とした長方形配置である。佐久地方で後期後半以降柱の本数が4本に統一されるのと矛盾しない。後期の住居に多く見られる棟持ち柱を持つ例は意外に少なくY-7・8号住居址に限られる。貯蔵穴状のピットはほとんどの住居に見られるが配置される場所は様々である。炉はすべて奥側の主柱穴間に設けられる。縁石を持つ地床炉を持つ住居が5軒と最も多く、縁石を持たない地床炉が二例、土器埋設炉は一例である。この状況は佐久地方の千曲川右岸地域の様相と一致する。ベッド状遺構はY-7号住居に見られるが、他の住居と比べて特殊性は感じられない。

焼失住居 北群ではY-5号住居址、南群ではY-8・9号住居址が焼失していた。いずれもあらかじめ片づけた後、焼却した状況で、偶発的な火災は考え難い。焼却した住居とされない住居に現象面で差異は認められない。取えて言えば、長軸5mを越える住居の4例中3例が焼却されている点にある。やや大振りの住居を焼却したのであろうか。また、Y-5号住居址からは他の住居に出土を見ない磨製石鏃や土製紡錘車(同時期の下荒田遺跡Y-2号住居址では一点出土)が存在する点は祭祀行為なども想像され示唆的である。

弥生文化の源流があるとされる高床住居に住む中国雲南省やタイの少数民族の集落は、現在でも移動あるいは伝染病などで住居を放棄する場合、住居を焼きはらう風習があるという。この民俗例をただちに中部高地の弥生集落に援用することは無理があるとしても、意図的な焼失の状況や、やや大振りの首長宅が想定される住居をねらっての焼却、また、古墳初頭段階での塚田遺跡

第13表 細田遺跡弥生住居一覽表

遺構名	検出位置	形態	長 軸	短 軸	床面積	長軸方位	炉	備考
Y-1住	D-5グリッド	隅丸長方形	4.96m	3.84m	17.19㎡	N-72° E	なし	柱穴なし
Y-2住	D-6グリッド	隅丸長方形	4.84m	4.24m	19.97㎡	N-14° W	地床炉	
Y-3住	C-5グリッド	隅丸長方形	4.96m	4.24m	20.16㎡	N-88° E	地床炉+縁石	
Y-4住	D-5グリッド	隅丸長方形	4.60m	3.92m	17.55㎡	N-84° E	地床炉+縁石	
Y-5住	E-6グリッド	隅丸長方形	5.28m	3.84m	19.14㎡	N-15° W	地床炉+縁石	焼失住居
Y-6住	E-6グリッド	隅丸長方形	3.56m	(3.24m)	(6.09)㎡	N-3° W	なし	
Y-7住	C-10グリッド	隅丸長方形	5.05m	4.22m	20.59㎡	N-7° E	地床炉+縁石	ベッド状遺構
Y-8住	C-10グリッド	隅丸長方形	5.03m	4.91m	22.75㎡	N-4° W	地床炉	焼失住居
Y-9住	C-8グリッド	隅丸長方形	5.73m	4.52m	24.8㎡	N-8° W	土器埋設炉+縁石	焼失住居
Y-10住	B-5グリッド	隅丸長方形	4.87m	4.24m	18.75㎡	N-82° E	地床炉+縁石	

への移住の可能性が濃厚な状況などを勘案すると細田遺跡に居住した人々が、集落を去るにあたって祭祀的な意味も込めて住居を焼きはらっていったと考えることもできるのである。

### (3) 佐久地方弥生集落の概観

次に細田遺跡は佐久地方の弥生集落の中ではどのような位置を占めるのであろうか。当地方の弥生集落を概観して考えてみよう。

**立地** 長野県の東端、佐久地方は千曲川によって大きく南北に分断され、対面する二つの地域は地形・地質が大きく異なる。北側は浅間山南麓、南側は八ヶ岳北東麓にあたり、この二つの火山の噴出物によって南北両地域はそれぞれの地質が構成されている。

弥生時代遺跡の立地をみると、浅間山・八ヶ岳両山麓の末端部、換言すれば佐久盆地の中央平坦部に最も集中する。この遺跡密集地帯は中期後半から後期（Ⅲ期新～Ⅴ期）の弥生集落遺跡の分布域でもあり、水田開拓可能な温暖な湿地帯を控えた標高で670～720mの低台地の範囲におおむね収まる。佐久平ではこれ以上の地域では弥生集落の発掘例は稀であり、奇しくも現在の被冷害ラインと一致する。唯一の例外は810mの高燥地帯から発見された御代田町細田遺跡の竪穴住居9軒からなる集落である。

ちなみに前期～中期前半（Ⅰ～Ⅲ期古）に関しては集落は現状で皆無、土器資料の発見例も少なく、その分布は南佐久郡の山間部に集中する傾向にある。

#### 分布

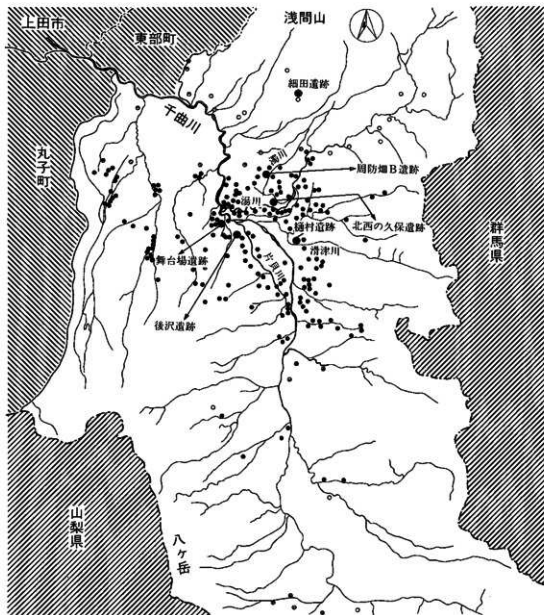
中期後半～後期の集落分布域はほぼ一致する。中期後半の占地する遺跡には必ず後期集落も重なり、一方後期集落単独の遺跡も数多い。また、中期後半に比して後期集落は発掘例、採集例とも数多く、一定領域内において人口増に伴う集落の新たな遺構が活発化したことが想起される。

前述の密集地帯はおおむね3つの集中区があり、いずれも千曲川の支流沿いにあたる。浅間南麓の湯川・濁川流域は佐久平で最も大きな弥生集落包蔵地帯で後期中頃に至ると前項で述べたように土器様相では斜走文施文の甕や篋形の矢羽根状文施文の壺など旧態とした要素が残存し、また、埋甕炉・土器埋設炉・石囲炉の存在など住居内の炉に強い地域的な個性が看取される。これに対面する八ヶ岳北東麓の片貝川流域は前者に比べて、土器様相に旧態が残らず、炉も地床炉に統一されるなど善光寺平に近い様相を示す。

#### IV 総括

##### 弥生集落の規模

佐久平で集落全域が把握できる調査例は、今回発掘調査された御代田町細田遺跡と北西の久保遺跡があるに過ぎない。また、それに準じるのが佐久市極村・後沢・舞台場遺跡である。まず、細田遺跡のほか4遺跡を分析し、佐久平の弥生集落の規模を推察してみよう。



第54図 佐久平の弥生遺跡分布 (1 : 300,000)

北西の久保遺跡<sup>90</sup>

湯川右岸の標高690m内外の幅60~80m、長さ250m、面積15,000㎡の狭隘な舌状台地上に立地する。昭和57・60年の発掘調査により、台地上全面が発掘され中期後半92軒、後期38軒の竪穴住居からなる複合集落が明らかにされた。集落は中期後半と後期の間に一・二世代の断絶が見られ、継続して営まれたものではない。ちなみに同台地上には後期集落に対応すると考えられる四隅の切れる方形周溝墓1と木棺墓7からなる墓群も検出されている。

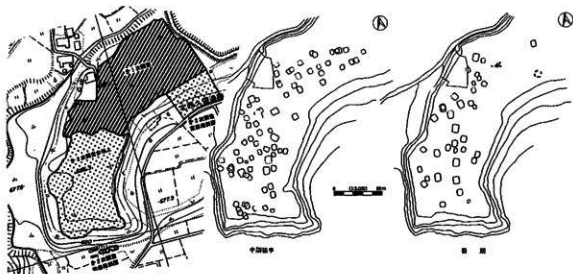
規模 92軒からなる中期集落は土器様相からみれば2小期に別れる程度で明確な型式差は持たない。したがって比較的短期間に集中的に営まれた集落であり、一時期の併存は40軒前後であったことが推定される。

38軒検出された後期集落は前半と後半に大別されるが、型的な隔りがあり中期のような継続性は認められない。それぞれ20軒前後が併存したと考えられる。

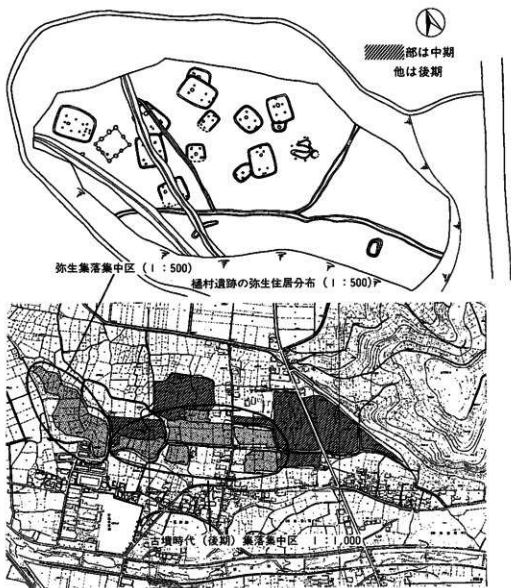
樋村遺跡<sup>91</sup>

北に志賀川、南に滑津川が西流する合流点にはさまれた標高673~690mの氾濫沖積微高地に立地する。弥生住居が最も集中するのは西側先端部で、一段高い東側は6・7世紀以降の300軒を越える古代集落が主体を占め、弥生住居の分布は散漫になる。

規模 おおむね全域が調査されたと考えて良い。中期後半は4軒、後期前半は9軒の竪穴住居址が検出されている。出土遺物の分析がなされておらず、根拠をもった細別はできないが、中期後半はおおむね1時期、後期前半は重複があるため、2小期の変遷があったと考えられる。



第55図 北西の久保遺跡の弥生中期後半~後期の竪穴住居分布 (1:4,000)



第56図 樋村遺跡の弥生集落

#### 後沢遺跡

北上する県道相浜～本町線沿いに、小宮山の家並みが途切れた西側の舌状台地上の一体を占め、標高700m内外、片貝川との比高40mを測る。遺跡は300×60mの台地上全体に広がり、更に南接する緩斜面に続くものと思われる。弥生集落はこのほぼ全域に展開している。

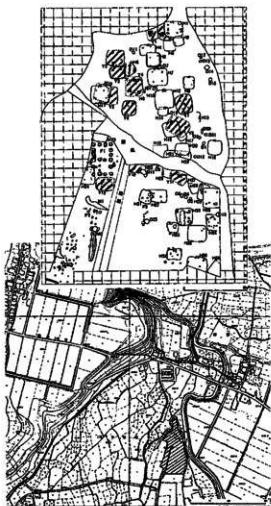
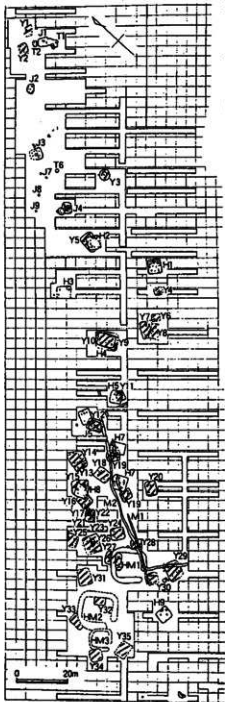
規模 トレンチ調査のため若干の遺漏はあろうが、弥生集落のほぼ全容は把握できる。中期後半3軒、後期後半32軒が検出された。これも出土遺物の検討はなされていないが、中期段階では1時期、後期段階は8軒の重複が見られたため2時期以上の変遷が想定できる。

## 舞台場遺跡

東立科付近から流出した千曲川に合流する宮川が形成した標高646m内外の段丘上に立地する。

現河床との比高は4m程である。

規模 弥生時代後期後半の集落のほぼ全城が調査されたと考えてよい。13軒検出され、重複関係・土器様相より2小期にわたる変遷が指摘できる。後期後半の古相は8軒、新相は5軒であったと考えられる。



第57図 後沢遺跡の遺構配置 (斜アミ部弥生住居) 第58図 舞台場遺跡遺構配置 (斜アミ部弥生住居)

#### IV 総 括

以上を概括すると佐久平の弥生集落規模は次のように想定される。

##### 中期後半

北西の久保遺跡の40軒に及ぶ集落が最大規模である。この他分析した榑村・後沢遺跡はそれぞれ4軒・3軒であり、最小単位の小集落である。全容が把握できない和田上<sup>08</sup>・清水田<sup>09</sup>・西八日町<sup>02</sup>・根乃井芝宮<sup>03</sup>・西裏竹田峯遺跡<sup>06</sup>なども、北西の久保遺跡を越えるとは考えがたく、北西の久保遺跡を佐久地域中期後半の最大級集落と考えて大過ない。

##### 後期前半

北西の久保遺跡で想定された20軒前後を軸にして他集落と対比する。2小期にわたって継続する周防畑B遺跡<sup>09</sup>では23軒の竪穴住居が検出されている。集落全体の半分以下の調査でしかなく、全域ではこの倍以上の竪穴住居が検出されることが予想され、北西の久保の規模（20軒前後）と合致するかこれを越えそうである。その他の部分的発掘調査遺跡をみると、榑村<sup>08</sup>で9軒に満たない集落が把握されているほかは、森下<sup>07</sup>・野馬窪<sup>08</sup>・西裏竹田峯遺跡<sup>06</sup>など全容推測不能な調査例があるに過ぎない。したがって、北西の久保、周防畑B遺跡を越える規模の集落の存在の可能性は薄く、後期前半代では20軒前後が大規模な集落の単位と考えておこう。

##### 後期後半

やはり、北西の久保遺跡の20軒前後を軸にして他集落と対比する。ほぼ全域が調査された舞台場遺跡で2小期にわたり13軒、細田遺跡で9軒、全域に近い調査の後沢遺跡では詳細な検討がないが2期以上にわたり32軒であり、いずれも北西の久保遺跡を越えそうにない。全容が把握できない清水田遺跡<sup>09</sup>を内包する円正坊遺跡群では相当規模の遺跡の広がりか予想されるがこれも北西の久保と匹敵するか、若干越える程度と考えておきたい。したがって、後期後半段階の最大級集落は現状では後期前半と同じく20軒前後としておこう。

ちなみに終末段階だけを取り上げると細田遺跡で併存9軒、舞台場<sup>08</sup>で5軒であり、概して小規模。佐久市下小平遺跡は検出された住居5軒であるが、立地する第2段丘面1/7程度の調査であるため、相当な広がりも想像できる。但し、概して遺跡数は少なく、前代と比べて後退が感じられる。

また、環濠については佐久地域では西一里塚<sup>03</sup>・戸坂遺跡<sup>06</sup>など弥生終末段階にのみ見られる。

#### (4) ま と め

以上の状況から見て細田遺跡の弥生集落は佐久平の中では小規模な部類に入る。このような高冷地における弥生終末～古墳初頭における小集落の調査例は軽井沢町<sup>09</sup>、小諸市石神<sup>06</sup>などで漸次



増加し、浅間山麓一帯に該期の集落が点在する事実が判明しつつある。日本列島の歴史上の大変革期古墳社会への移行の始まりに連動しての拡散現象とも考えられるが、細田遺跡に限っては環濠や武器などが欠如し、軍事あるいは政治色は薄く、あくまで弥生時代の伝統的な農耕を指向して集落形成したと考えたい。この点については石神遺跡の報告を待って再考したい。

小集落であることの要因については高冷地の中で稲作の可能性を模索して比較的好条件の土地を見だし、水田開拓に乗り出したものの、周囲は冷涼であるが故に可耕地は限られたものであり、新たな開拓ができず生産力の拡大が果たされなかった結果によるものと判断できる。このことは次の塚田遺跡の集落が拡大されていないことから傍証される。御代田の地で始めて農耕を導入した人々は古墳初頭以降いったどこへ行ったのだろうか。その後、御代田町の塩野地区では古墳時代後期まで約3世紀遺跡が空白となる。単に未発見なのか、いづこかへ去ったのか今はわからない。

### 3 その他の遺構・遺物について

縄文時代では前期初頭・中期前半の土器片が弥生住居内、包含層から出土した。遺構は把握されなかったものの、細田遺跡を取り巻く川原田・城之腰・塚田・下荒田・滝沢などの諸遺跡では該期の集落が多出している状況から見れば、当時、細田遺跡も何か利用がされていたことが想定される。

弥生時代を経て平安時代まで細田遺跡は長い空白を迎える。今回の調査で見つかった平安時代のH-1号竪穴住居址は、内面に丁寧な黒色研磨を施した高台付坪に象徴される出土遺物より9世紀後半に位置付けられるものである。周囲にはこの一軒のほかはまったく住居が検出されていない。また、カマドが付設されないなど通常佐久地方の発掘調査で検出される平安時代集落とは異質な状況を示すものである。周囲の川原田・城之腰・下荒田・滝沢などの諸遺跡からは9世紀後半を起点とする中・小集落が検出されているが、概ね東濃系灰釉陶器の流入が頻繁となる9世紀末段階に発達を見せ、それ以前の集落については概して小規模である。このような集落の動態は9～10世紀段階の塩野地区における開拓状況を反映していると考えられ、平成6年度の本事業の終結時にはその歴史性を更に追求する必要がある。

最後に今回は遺跡のほぼ全面を調査する機会に恵まれた。遺構検出密度からすれば希薄な部類に入る本遺跡であるが、御代田における稲作の開始を大幅に遡らせる重要な歴史的発見を現代に生きる我々にもたらしてくれた。どんなに小さな遺跡でも発掘調査によって証明される歴史的意味の大きさを我々は再認識しなければならない。

註

- (1) 榎橋 1990 「第3章 土器の移り変わり」『赤い土器を追う』佐久考古学会
- (2) 佐久市清水田・下小平・池畑・腰巻遺跡の竪穴住居址内から出土している。
- (3) 千野 浩 1989 「千曲川流域における後期弥生土器の変遷」『信濃』Ⅲ・41-4
- (4) 前掲註1160頁参照
- (5) 前掲註1159頁参照
- (6) 工藤かよ子ほか 1981 『下小平遺跡』佐久市教育委員会
- (7) 三石宗一ほか 1986 『池畑・西御堂』佐久埋蔵文化財調査センター
- (8) 三石宗一ほか 1986 『龍の峯古墳群』佐久埋蔵文化財調査センター
- (9) 花岡 弘 1984 『久保田』小諸市教育委員会
- (10) 花岡 弘 1989 『和田原・鎌田原』小諸市教育委員会
- (11) 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要 2』
- (12) 拙稿 1992 「佐久地方弥生集落の変遷」  
『中部高地における弥生集落の現状-長野県考古学会30周年記念大会資料集』
- (13) 1992.10.24 若林弘子先生の「高床式建物の源流」講演会より
- (14) (3)佐久地方弥生集落の概観については前掲註117を加筆・修正したものである。
- (15) 前掲註(1)で指摘。
- (16) 小山岳夫ほか 1987 『北西の久保-南部台地上の調査』佐久埋蔵文化財調査センター
- (17) 島田志子ほか 1985 『榎村遺跡(造橋編)』佐久市教育委員会
- (18) 林幸彦 1982 「後沢遺跡」『長野県史考古資料編 全一巻(2)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- (19) 森泉かよ子ほか 1984 『舞台場』佐久市教育委員会
- (20)~(22) 佐久考古学会 1990 『赤い土器を追う』
- (23) 1992 佐久市教育委員会によって調査。
- (24) 高村博文ほか 1986 『西裏・竹田峯』佐久埋蔵文化財調査センター
- (25) 林幸彦 1982 「岡防畑B遺跡」『長野県史考古資料編 全一巻(2)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会
- (26) 前掲註117
- (27) 三石宗一 1989 『森下』佐久埋蔵文化財調査センター
- (28) 前掲註119
- (29) 前掲註120
- (30) 前掲註121
- (31) 前掲註119
- (32) 前掲註116
- (33)~(34) 前掲註121
- (35) 波辺重義・森嶋穂・森山公一 1979 「北佐久郡軽井沢町遺跡の調査」『長野県考古学会誌』34
- (36) 1991 長野県埋蔵文化財センターによって調査。

V

付 編

<目次>

はじめに	P. 87
1. 住居構築材の樹種	P. 88~91
(1) 試料	P. 88
(2) 方法	P. 88
(3) 結果	P. 88~90
(4) 考察	P. 91
2. Y-3号住居址より出土した弥生式土器中の灰白色物質 (No127) の材質	P. 91~100
(1) 試料	P. 91~93
(2) 分析方法	P. 94~95
a. 植物珪酸体分析	P. 94
b. 珪藻分析	P. 94
c. X線回折分析	P. 94~95
(3) 結果	P. 95~100
a. 植物珪酸体の産状	P. 95
b. 珪藻化石の産状	P. 95~96
c. X線回折分析	P. 96
(4) 考察	P. 96~100
3. まとめ	P. 100~101
文献	P. 101

<図表一覧>

図1 Y-5号住居址における炭化材(建築部材)の出土状況及びその樹種

図2 土器内灰試料の主要珪藻化石

図3 土器内灰試料のX線回折図形

表1 Y-5号住居址(弥生時代末期)出土炭化材の同定結果

表2 土器内灰試料の植物珪酸体分析結果

表3 土器内灰試料の珪藻分析結果

## 細田遺跡における自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

細田遺跡（御代田町塩野地区所在）は、浅間山南麓の標高820m内外の細長い屋根上に立地する。本遺跡を含む塩野西遺跡群では、発掘調査により縄文時代早～中期、弥生時代後期、古墳時代、平安時代の住居址などの遺構が検出された。また7世紀代には、屋根上に細田古墳・塚田古墳などの円墳が築造されたことが明らかとなった（御代田町教育委員会、1992）。このうち、細田遺跡の弥生時代終末期に属する集落では10軒の竪穴住居址が検出され、中でもやや大型の2軒の住居址（Y-5、9号住居址）では住居の構築材と考えられる炭化材が出土した。

佐久盆地では、古墳時代初頭をはじめとする焼失住居址の検出例が比較的多く、構築材と考えられる炭化材が検出されることも多い。すでに構築材の材同定を行った例もあり、御代田町十二遺跡（バリノ・サーヴェイ株式会社、1988a）、根岸遺跡（バリノ・サーヴェイ株式会社、1989a）、小諸市鋳物師屋遺跡（バリノ・サーヴェイ株式会社、1988b）、和田原遺跡（バリノ・サーヴェイ株式会社、1989b）、関口遺跡（バリノ・サーヴェイ株式会社、1991）等で報告されている。これらの調査では、古墳時代～平安時代までの構築材の同定を行っている。同定された樹種を見ると、時代を問わずコナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ節が圧倒的に多い。

これまで佐久盆地で行われてきた調査では、古墳時代初頭の材同定が最も古い例であり、弥生時代に属する構築材の材同定を行った例はない。そのため、細田遺跡から検出された弥生時代後期の構築材は、佐久盆地における構築材の変遷を考える上で貴重な資料となると期待される。特にY-5号住居址では、比較的良好な状態で炭化材が出土しており、中にはある程度の部材推定が可能な試料もある。そこで今回の調査では、細田遺跡のY-5号住居址から検出された構築材の樹種を知るために炭化材同定を行い、既存資料との比較や当時の用材選択について検討を行う。

また、Y-3遺構からは弥生式土器が出土しており、中には何らかの灰と思われる灰白色物質が詰まっていた。灰白色物質中には、貝殻に似た白～灰白色の板状の固まりや植物が燃焼した後に残る灰状のような粉末が認められる。今回の調査では、この物質の材質の推定も試みる。分析手法としては、板状物質と粉末状物質を対象として植物珪酸体分析、板状物質を対象としてX線回折分析を選択する。

植物珪酸体分析を選択する理由は、植物、特にイネ科植物が燃焼した後の灰には、植物珪酸体が組織片の形で残留している例が多く（例えば、佐瀬、1982；大越、1985）、植物珪酸体がイネ科

植物の種類ごとに特有な形質を持つことから、燃料材として利用されたイネ科植物が推定できることにある。また、植物珪酸体のプレパラート中に珪酸化石が認められたため、材質や物質の由来についての情報が得られることが予想された。そこで、当初予定していなかった珪酸分析もあわせて実施することとした。X線回折分析を選択する理由は、含まれる化合物によって特徴的なX線回折線図形が得られることから、その化合物が判定できることにある。

## 1. 住居構築材の樹種

### (1) 試料

試料は、Y-5号住居址から採取された構築材と考えられる炭化材115点(Na1~Na115)である。

### (2) 方法

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接戦断面)の3断面を作製、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定する。

### (3) 結果

115点の試料は、クヌギ節、コナラ節、クリ、キハダ、トリネコ属の5種類に同定された(表1)。

各種類の観察された主な解剖学的特徴や現生種の一般的特徴等を以下に記す。なお、和名・学名等は主としては「原色日本植物図鑑 木本編I・II」(北村・村田, 1971, 1979)に従い、一般的特徴については「木の事典 第1巻~第17巻」(平井, 1979-1982)も参考にした。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp)

ブナ科

試料名: 4, 5, 7-9, 12, 15, 26, 31, 34-36, 38, 40, 44, 59, 60, 63, 65, 69, 73, 82, 85-87, 89-92, 95, 97, 98, 101, 102, 105, 106, 108, 109

環孔材で孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸~厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものや複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。以上の特徴からコナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種に同定した。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima* Carruthers)とアベマキ(*Q. variabilis* Blume)の

2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

試料名：1, 10, 11, 13, 14, 16-19, 21-25, 27-30, 32, 33, 37, 39, 41-43, 45, 46,  
48, 50, 52, 54, 55, 61, 62, 66-68, 71, 74-76, 78-81, 83, 84, 93, 96, 100,  
103, 104, 107, 110-114

環孔材で孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。以上の特徴からコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種に同定した。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、ミズナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難。器具・機械・構材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Carruthers) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

試料名：2, 3, 58, 70, 94

管孔材で孔圏部は1-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2-3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明

瞭。以上の特徴からクリに同定した。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楳木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科

試料名：57

環孔材で孔圏部は2～5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し紋様をなす。大道管は横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では楕円形～多角形で複合管孔をなし、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状および帯状。年輪界はやや不明瞭。以上の特徴からキハダに同定した。

キハダは北海道・本州・四国・九州の水湿地を好んで生育する落葉高木である。材はやや軽軟で、加工は容易、強度は小さいが耐湿性が高い。建築・器具・家具・薪材などの用途がある。キハダの名は内皮が黄色であることによるが、この内皮にはアルカロイドを含み、胃腸薬として古くから知られ、また染料としても用いられた。

・トネリコ属の一種 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科

試料名：6, 20, 47, 49, 51, 53, 56, 64, 72, 77, 88, 99, 115

環孔材で孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織の間では網目状～篩状となる。放射組織は同性(～異性III型)、1～3(5)細胞幅、1～40細胞高であるが、特に20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。以上の特徴からトネリコ属の一種に同定した。

トネリコ属には、シオジ (*Fraxinus spaethiana* Lingelsh), トネリコ (*F. japonica* Blume), アオダモ (*F. serrata* (Nakai) Murata) など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ (*F. longicuspis* Sieb.)・マルバアオダモ (*F. sieboldiana* Blume)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ (*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.) は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、韌性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。



#### (4) 考察

115点の試料は、これまで佐久盆地で行われてきた住居構築材の材同定結果と同様にクヌギ節、コナラ節が最も多く、2種類で88点(76.5%)同定された。これらの試料の出土状況を見ると、住居址の中央部から放射状にのびる試料と、壁に対して平行な試料に大別できる(図1)。前者は比較的壁寄りに多く、後者は中央付近に多くみられる。これは住居が崩壊した際の状況を表していると考えられ、中央付近の壁に対して平行な試料は上屋材、放射状の試料は主として垂木と思われる。この出土状況から、上屋材がほぼ真下に落下し、それにともない垂木が中央に向かって倒れた様子が推定できる。出土した炭化材が、壁寄りほどレベルが高く中央ほどレベルが低いこともこの推定を支持している。

クヌギ節とコナラ節は、古墳時代以降の調査でも数多く出土している。この2種類が同じ住居址から検出される例も、根岸遺跡(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1989a)、関口遺跡(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1991)等で見られる。しかし、その出土数を比較すると、どちらか一方が圧倒的に多く、今回の結果のように両種の出土数があまり変わらない例は珍しい。Y-5号住居址から検出されたクヌギ節とコナラ節について、樹種別に出土状況を見ると、クヌギ節の試料には小さいものが多く、50cmを越える試料はほとんどない。一方、コナラ節は50cmを越える試料に多く、小さい試料に少ない。これは出土数にはそれほど違いがなかったが、両種の用途には違いがあったことを示しているのかもしれない。

クリ、キハダ、トネリコ属の出土状況を見ると、Na94を除いたほとんどの試料が住居の壁寄りから検出されている。その用途もクヌギ節、コナラ節と比較すると補助的な役割に使用されていた可能性が高い。また、Na70のようにクリの腐りにくい特性を利用したと考えられる立ち杭も見られる。

今回の結果をみると、いくつかの相違点はあるが、弥生時代後期と古墳時代以降では構築材の樹種選択に大きな変化はなかったように思われる。いくつか見られた相違点が、弥生時代と古墳時代の用材選択の違いを示すものか否かは現時点では判断することができない。今後さらに資料を蓄積し、検討していく必要がある。

## 2. Y-3号住居址より出土した弥生式土器中の灰白色物質(Na127)の材質

### (1) 試料

Y-3号住居址内から出土した弥生式土器中の灰白色物質1点(試料番号127)である。

表1 Y-5号住居址(弥生時代末期)出土炭化材の同定結果

番号	樹種名	備考	番号	樹種名	備考
1	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		59	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
2	クリ		60	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
3	クリ		61	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
4	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	62	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		63	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
6	トネリコ属の一種		64	トネリコ属の一種	産木?
7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		65	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
8	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		66	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
9	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		67	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
10	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	68	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
11	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		69	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
12	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	70	クリ	立枝
13	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	上層材?	71	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
14	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		72	トネリコ属の一種	産木?
15	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	73	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
16	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	74	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
17	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		75	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
18	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		76	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
19	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	77	トネリコ属の一種	
20	トネリコ属の一種		78	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
21	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		79	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	立枝
22	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	80	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
23	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	81	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
24	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	82	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
25	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		83	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	上層材?
26	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	84	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	上層材?
27	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	85	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
28	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	上層材?	86	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
29	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	上層材?	87	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
30	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		88	トネリコ属の一種	産木?
31	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		89	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
32	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		90	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
33	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		91	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
34	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		92	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
35	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	93	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
36	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種		94	クリ類似種	
37	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		95	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
38	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	96	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	上層材?
39	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	97	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
40	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	98	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
41	コナラ属コナラ亜属コナラ節類似種		99	トネリコ属の一種	
42	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		100	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
43	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	101	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
44	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?	102	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	上層材?
45	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		103	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
46	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		104	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
47	トネリコ属の一種		105	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
48	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	106	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
49	トネリコ属の一種		107	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?
50	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	産木?	108	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	産木?
51	トネリコ属の一種		109	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
52	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		110	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
53	トネリコ属の一種		111	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
54	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		112	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
55	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種		113	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
56	トネリコ属の一種		114	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	
57	キハダ		115	トネリコ属の一種	
58	クリ				

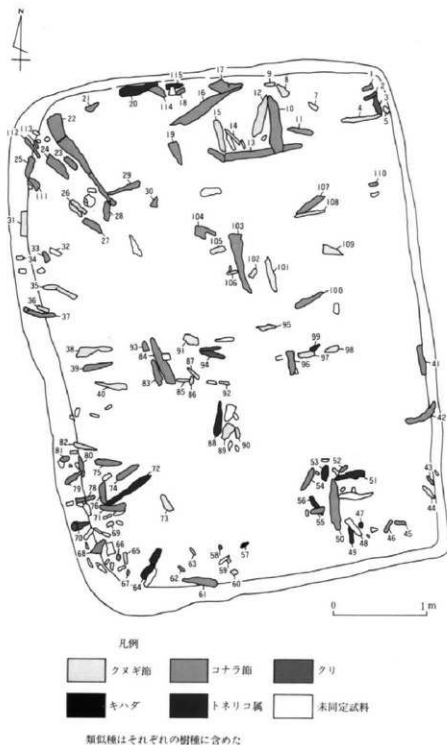


図1 Y-5号住居址における炭化材（建築部材）の出土状況およびその樹種

## (2) 分析方法

## a. 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐瀬 (1986) の方法を参考にして次のように行った。<sup>\*1</sup> 試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水 ( $H_2O_2$ )・塩酸 (HCl) 処理、超音波処理 (70W, 250KHz 1分間)、沈定法、重液分離法 (臭化亜鉛, 比重2.3) の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に稀釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリウラックスで封入しプレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。今回は、目的の項で述べたように植物珪酸体を含む組織片の産状が重要であるため、イネ科葉部短細胞列や葉身機動細胞列といった組織片の産状に注目して分析を行った。

\*1: 近藤・佐瀬 (1986) の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生や栽培植物の有無を推定するものである。

## b. 珪藻分析

試料を湿重で約 5 g 秤量し、過酸化水素水 ( $H_2O_2$ )、塩酸 (HCl) の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、プリウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計算した。この際、破損のない完形殻と破損のある非完形殻とを区別して計数し、珪藻殻の保存度(完形殻数/総数×100)を求め考察の際に考慮した。種の同定は、K. Krammer & Lange-Bertalot (1986・1988・1991) などを用いた。また、環境の推定に当たっては、安藤 (1990) の環境指標種群を用いた。

検出された珪藻化石は、アルファベット順に並べて産出個体数を表に示した。また、表中には個々の種の塩分・水素イオン濃度 (pH)・水の流動性に対する適応性(生態性)や環境指標を区別して表示した。

## c. X線回折分析

## ①試料調製

灰試料をX線分析用試料粉砕器(平工製作所製TI-100)で微粉砕し、アルミ板試料法によってX線回折用の分析試料を作成した。

## ②測定

調製された分析試料について、次の条件でX線回折分析を行った。

装置：島津製作所製XD-3A

Target : Cu (K  $\alpha$ )      Scanning Speed : 2°/min  
 Filter : Ni      Chart Speed : 2 cm/min  
 Voltage : 30KVP      Divergency : 1°  
 Current : 30mA      Recivinf Slit : 0.3mm  
 Count Full Scale : 5,000c/s      Scanning Range: 2 ~ 60°  
 Time Constant : 1.0sec

## ③同定

X線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）によって測定された回折線の回折角度、原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を検索した。

## (3) 結果

## a. 植物珪酸体の産状

検出された種類とその個数を一覧表で示す(表2)。植物に由来する組織片は、全く検出されない。ただし、キビ族・タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族（ススキ属）・イチゴツナギ亜科の短細胞珪酸体あるいは機動細胞珪酸体がわずかに検出される。

## b. 珪藻化石の産状

灰白色物質中には、多くの珪藻化石が含まれていた。産出した珪藻化石を表2に示す。また、

表2 土器内灰試料の植物珪酸体分析結果

種類 (Taxa)	試料番号	127
イネ科葉部短細胞珪酸体		
キビ族		4
タケ亜科		2
ヨシ属		7
ウシクサ族ススキ属		2
イチゴツナギ亜科		3
不明キビ型		20
不明ヒゲシク型		6
不明ダンチク型		11
イネ科葉部機動細胞珪酸体		
キビ族		3
タケ亜科		1
ヨシ属		2
ウシクサ族		2
不明		7
合 計		
イネ科葉部短細胞珪酸体		55
イネ科葉部機動細胞珪酸体		15
検 出 個 数		70

産出種の合計を基数とする出現率が2%以上を示す分類群については、その産状を図2に示した。産出した珪藻化石のほとんどは淡水生種であり、産出分類群数は、13属43分類群(36種・6変種・未同定1)である。また、完形殻の出現率は75%と高い。

主な産出種は、流水不定性の *Achnanthes exigua*, *Nitzschia amphibia*, *N. hantzschiana* であり、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、好止水性の *Nitzschia sinuata* var. *delognei*, *Cyclotella stelligera*、貧塩—好塩性の *Rhopalodia gibberula*, *Amphora veveta*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* を伴う。このうち、*Achnanthes exigua* は現在の有機汚濁の進んだ水域に多く認められる好汚濁性種(渡辺ほか, 1988)、*Achnanthes lanceolata* は中—下流性河川指標種(安藤, 1990)、*Cyclotella stelligera* は湖沼浮遊性種、*Rhopalodia gibberula*, *Amphoraveveta* は少量の塩分がある方が良く生育する種である。

以上から、本試料の珪藻化石群集の組成は、流水不定性種が優占し、好汚濁性種や貧塩—好塩性種などの富栄養水域に特徴的な種が多産する特徴を有する。

#### c. X線回折分析

回折線図形を図3に示す。2 $\theta$ =22~24°に幅広いピークが認められることから、非晶質鉱物の存在が示唆される。また、27.7°のピークから長石、26.6°・20.8°のピークから石英、21.9°のピークからクリストバライトの存在が示唆されるが、いずれもそのピークは小さく、試料中の存在量はごく僅かとみられる。

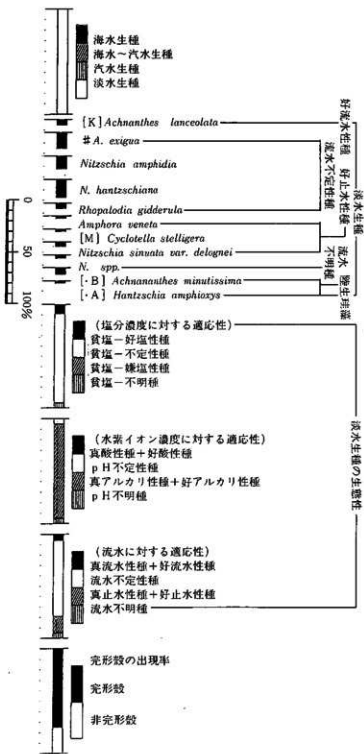
#### (4) 考察

弥生式土器中の灰白色物質中には、植物に由来する組織片が全く検出されなかったことから、イネ科植物やその他の植物が燃焼した後の灰とは考えにくい。わずかに検出されたキビ族・タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族(ススキ属)・イチゴツナギ亜科の植物珪酸体は、試料に土の混在が多少認められることから、これらの土の中に含まれていた可能性がある。

また、同試料中からは珪藻化石が多産したが、その種類数は多くの集水域から運搬・堆積された地層中の珪藻分析結果と比較すると少ない。原生の珪藻群落を調査すると、調査地点が珪藻の生育する最適条件内であれば多くの種が生育し種の多様性は高いが、最適条件から遠ざかれば遠ざかるほど珪藻群集を構成する種数は少なくなる。このような場所では、特定の1~3種が優占するようになり、種の多様性は低くなる。また、同じ水域内の優占種にしてみても少し(数十センチから数メートル)採取場所が離れば、別の種が優占するという報告(小林, 1986)もあり、原生の珪藻群集では局地性が高くなるといえる。今回の結果は、かつて土器内に水が入れられていたとすれば、その水が汲まれてきた場所の局地的な珪藻群集を反映している可能性がある。また、水を入れた状態で蓋をしたいで長期に野外に放置された場合には、生きた珪藻は土器



図2 土器内戻試料の主要硅藻化石



海水・汽水・淡水生種発出率・各種発出率・完形殻発出率は全体基数、淡水生種の生理種の比率は淡水生種の合計を基数として算出した。いづれも100個体以上検出された試料について示した。(環境指標種[X]; 中～下流性河川指標種[M]; 湖沼停滯性種; #; 好汚濁性種; 陸生珪藻 [-A]; A群; [-B]; B群)



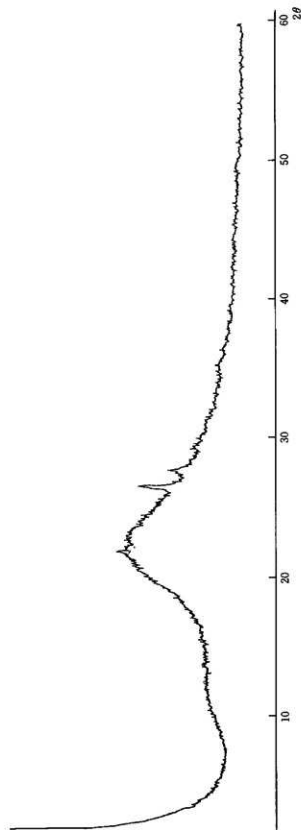


図3 土層内灰状物のX線回折図形

内の光の届く範囲で増殖することは十分に考えられることである。よって、灰白色物質中から産出した珪藻化石は、以上述べたような2つの由来を考慮する必要がある。また、産出した珪藻化石の生態性に着目すると、流水性種が多く止水性種は少ない。これは、河川等水の流れがある場所で水を汲んだ可能性を裏づけているかもしれない。また、止水性種の産出については、上流部の池沼等の止水域から流下してきたものか、あるいは流速の遅い河川水の中で生育した種（福島・小林，1975）に由来すると考えられる。

また、前述のように試料内には少量ではあるが土が混在している。この土が、当時生活が営まれていた時の土器内に混入したものか、住居廃棄後に混入したものか判断することは困難であるが、このような土壌と共に珪藻化石が混入した可能性も考えられる。しかし、X線回折の結果は板状の物質中に植物珪酸体または珪藻が混入していることを示唆しており、今回検出された珪藻化石の全てが土と共に混入した可能性は極めて低いといえる。

したがって、今回の珪藻分析結果は、物質の素材に直接関係している可能性よりも、物質の成因に水が深く関係している可能性を示していると考えられる。

X線回折では、本試料中にクリストバライトの存在が示唆された。クリストバライトは、結晶性珪酸により構成され、非晶質珪酸が熱やアルカリ金属の存在により転移して生成されることが知られている（近藤・佐瀬，1986）。本試料からは、植物珪酸体や珪藻殻が多く検出されているが、これらは共に非晶質珪酸で構成されている。これを考慮すれば、クリストバライトは熱の影響によって非晶質物質、特に非晶質珪酸の一部から生成されたと推測される。石英と長石については、試料に土の混在が多少認められるため、混入した土に由来すると推測される。何れにせよ灰白色物質は、非晶質鉱物を主体とした物質から構成されていると考えられる。

以上のように、今回の分析調査からは灰白色物質の材質を直接明確にすることはできなかった。ただし、これが熱を受けた可能性は指摘することができる。今後、この物質が詰まっていた土器の出土状況や土器の器型などの考古学的所見とともに検討を行う必要がある。また、現代における類似品の探索等も行う必要がある。

### 3. まとめ

Y-5号住居址から検出された構築材は、佐久盆地でこれまでに行われた事例中で最も多く検出されているクヌギ節・コナラ節であった。このことは、古墳時代以降に見られる樹種選択の傾向が弥生時代終末期には成立していたことを示している可能性があるが、古墳時代以降の傾向とは若干異なる部分も見られる。これが弥生時代後期の特徴といえるのかどうか、今後さらに類型の調査を進めていく必要がある。

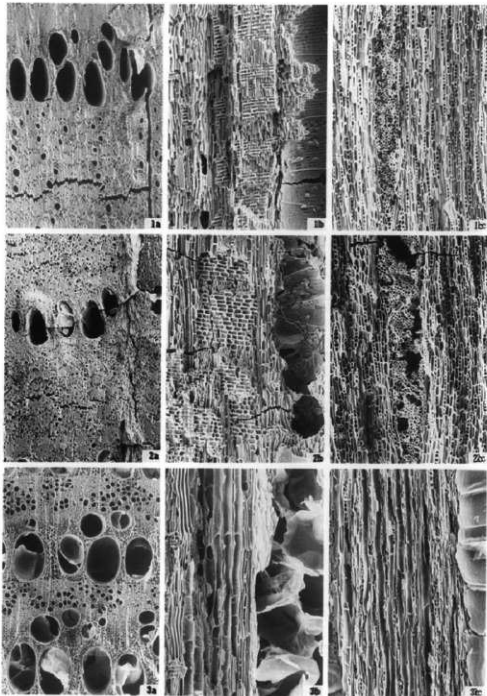
Y-3号住居址の土器内から検出された灰白色物質については、植物珪酸体分析・珪藻分析・

X線回折分析を行ったが、その材質を明らかにすることはできなかった。しかし珪藻分析結果にみられるように、この物質の成因を考える上で興味ある結果も得られた。今後は、考古学的所見に基づく再評価や現代における類似品の探索等も必要であろう。

## 文献

- 足立吟也 (1980) 6章 粉末X線回折法、機器分析のてびき 3, P. 64-76, 化学同人。
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, P. 73-88
- 平井信二 (1979-1982) 木の事典 第1巻-17巻, かなえ書房
- 福島 博・小林艶子 (1975) 6, 生物指標としての珪藻, 環境と生物指標 2 一水界編一, P. 54-60, 共立出版株式会社
- 五十嵐俊男 (未公表) X線粉末回折線総合解析プログラム, 46 P.
- 北村四郎・村田 暎 (1971, 1979) 原色日本植物図鑑 木本編 I・II 543 P., 545 P., 保育社
- 近藤謙三・佐藤 隆 (1986) 植物性酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 第25号, P. 31-64, 小林 弘 (1986) 9, 河川底生藻類の生態, 藻類の生態, P. 309-346, 株式会社内田老鶴園
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot. (1986・1988・1991) Bacillariophyceae, Suesswasser florav on Mitteleuropa 2 (1・2・3・4): P. 1-879, P. 1-585, P. 1-576, P. 1-433.
- 御代田町教育委員会 (1992) 塩野西遺跡群 細田・下弥堂・塚田・下寛田遺跡発掘調査概要報告書, 62 P.
- 日本粘土学会編 (1987) 粘土ハンドブック第二版, 1289 P., 技報堂出版
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1988 a) 十二遺跡出土炭化材の樹種同定, 「鎗師屋遺跡群 十二遺跡一長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一」, P. 393-399, 御代田町教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1988 b) 鎗師屋遺跡出土炭化材同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鎗師屋遺跡群 鎗師屋 長野県小諸市鎗師屋遺跡発掘調査報告書一」, P 116-117, 小諸市教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989 a) 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定, 「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在 鎗師屋遺跡群 根岸遺跡発掘調査報告書」, P 291-293, 御代田町教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1989 b) 和田原遺跡出土炭化材同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群 和田原・中原遺跡群 鎌田原一長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書一」, P. 83-88, 小諸市教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 関口A・B遺跡出土材の樹種同定, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口A・関口B・柏原遺跡群下柏原一長野県小諸市関口A・関口B・下柏原遺跡発掘調査報告書一」, P. 245-254, 小諸市教育委員会。
- 渡辺仁治・山田安恵子・浅井一視 (1988) 珪藻群集による有機汚濁指数 (DA1po) の止水域への適用, 水質汚濁研究11, no. 12, P. 765-773.

図版 I 炭化材の顕微鏡写真(その1)

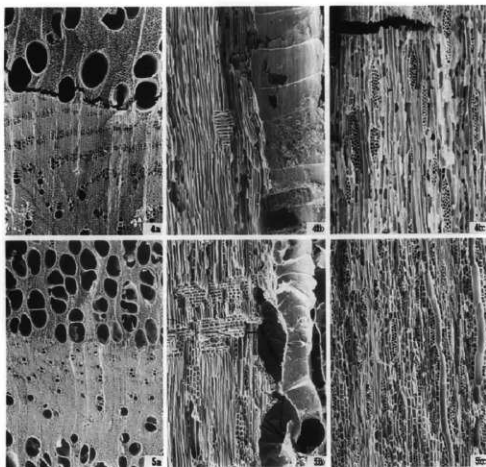


1. コナラ属コナラ亜属タヌギ節の一種 (Y-5 No40)
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (Y-5 No42)
3. クリ (Y-5 No58)

a : 木口, b : 径目, c : 板目

200 $\mu$ m : a  
200 $\mu$ m : b, c

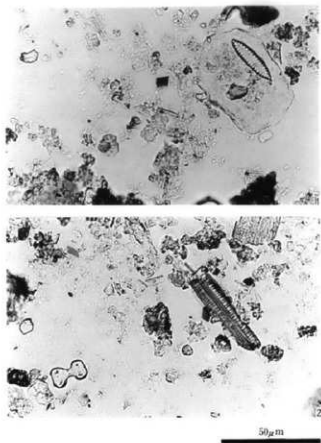
図版2 炭化材の顕微鏡写真(その2)



4. キハダ (Y-5 No57)  
 5. トネリコ属の一種 (Y-5 No88)  
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

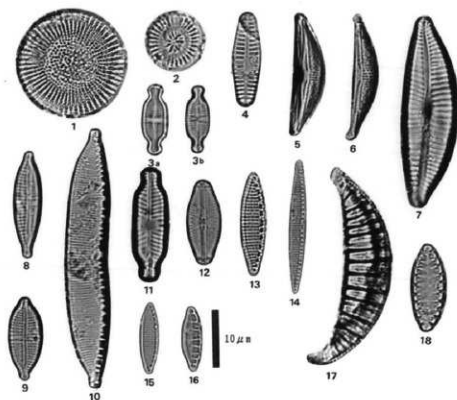
200 $\mu$ m: a  
 200 $\mu$ m: b, c

図版3 植物珪酸体分析プレパラートの状況写真



1. No127の状況写真 2. No127の状況写真

図版 4 珪藻化石の顕微鏡写真

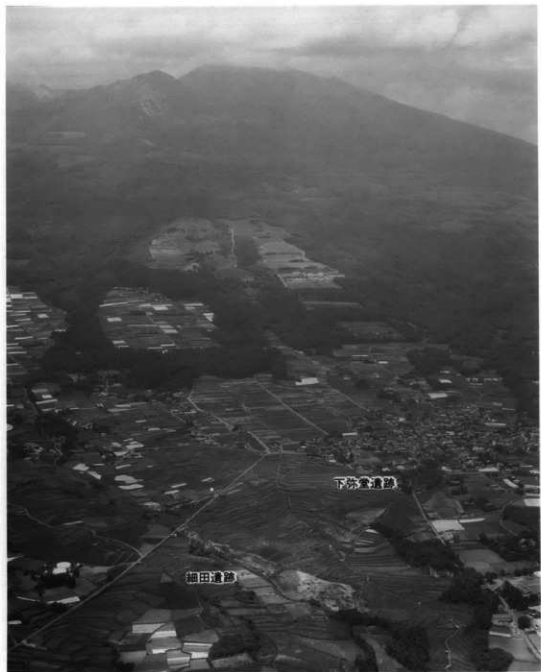


1. *Stephanodiscus astraea* (Ehr.) Grunow (Y-3; 試料番号127)
2. *Cyclotella stelligem* Cleve & Grunow (Y-3; 試料番号127)
- 3 a.b. *Achnanthes exigua* Grunow (Y-3; 試料番号127)
4. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (Y-3; 試料番号127)
- 5, 6. *Amphora veneta* Kuetzing (Y-3; 試料番号127)
7. *Cymbella turgidula* Grunow (Y-3; 試料番号127)
- 8, 9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (Y-3; 試料番号127)
10. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (Y-3; 試料番号127)
11. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (Y-3; 試料番号127)
12. *Navicula pupula* Kuetzing (Y-3; 試料番号127)
13. *Nitzschia amphibia* Grunow (Y-3; 試料番号127)
- 14, 15. *Nitzschia hantzschiana* Rabenhorst (Y-3; 試料番号127)
16. *Nitzschia sinuata* Var. *deloquel* (Grun.) lange-Bartalot (Y-3; 試料番号127)
17. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller (Y-3; 試料番号127)
18. *Suriella angusta* Kuetzing (Y-3; 試料番号127)

VI

写真図版





浅間山(2,560 m)とその裾野に位置する細田遺跡



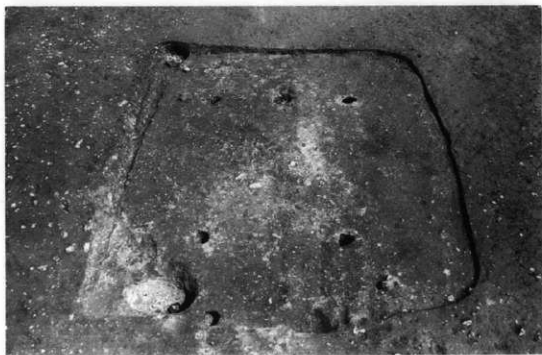
南方上空より細田遺跡を眺望する 株式会社測量協和撮影



細田遺跡の遺構配置



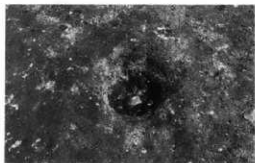
Y-1号住居址(南方より)



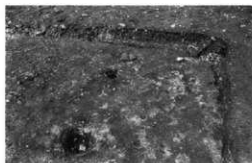
Y-2号住居址(南方より)



Y-2号住居址掘り方(南方より)



Y-2号住居址炉



Y-2号住居址遺物出土状態



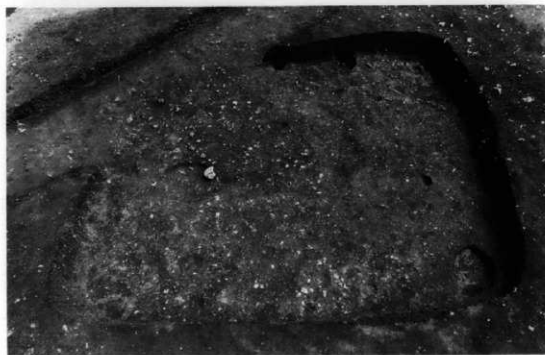
Y-2号住居址遺物出土状態



Y-2号住居址遺物出土状態



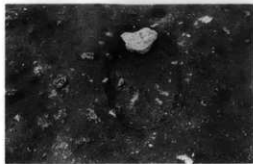
Y-3号住居址



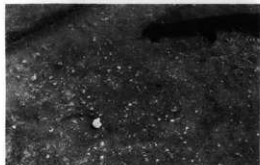
Y-3号住居址



炉



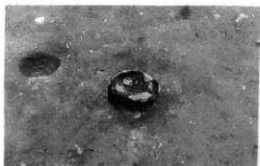
炉



炉と対ビット



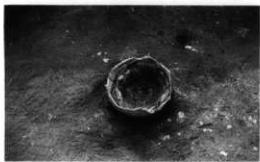
対ビット内及周辺遺物出土状態

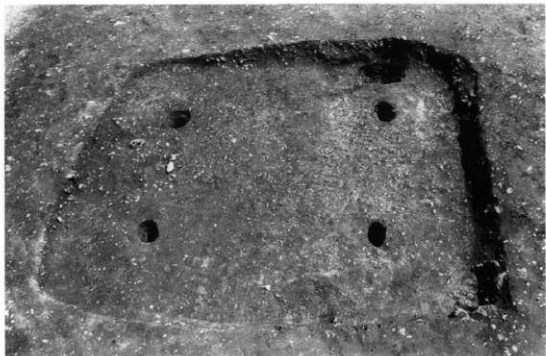


壺の中に灰がつまっていた



裏出土状態

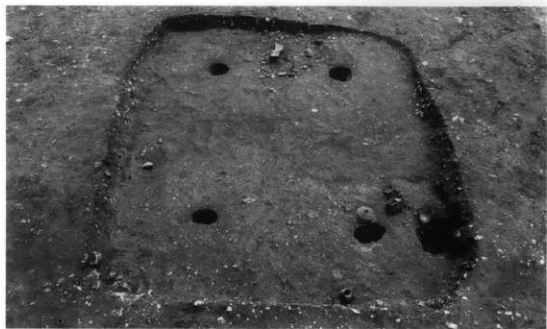




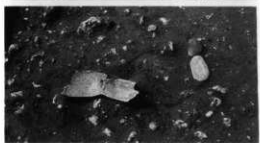
Y-4号住居址(北方より)



Y-4号住居址(北方より)



Y-4号住居址(西方より)



Y-4号住居炉

Y-4号住居址遺物出土状態

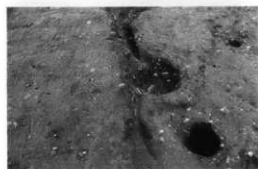


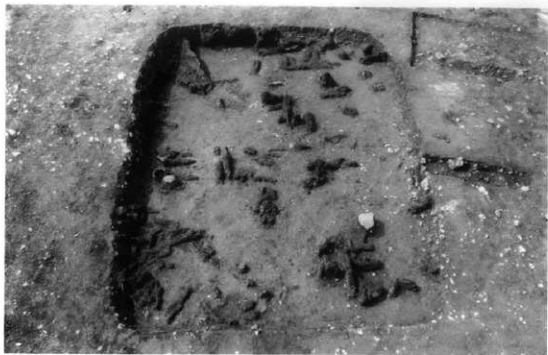


Y-5号住居址(南方より)

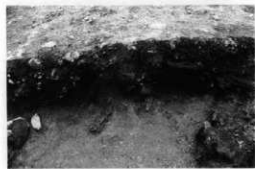
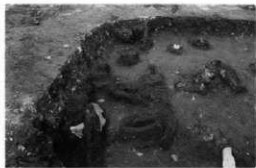


炉





Y-5号住居址炭化材出土状况



Y-5号住居址炭化材出土状况



Y-5号住居址炭化材出土状况



炭化米きがし



Y-5号住居址掘り方



Y-6号住居址(南方より)



Y-7号住居址(南方より)



51



51



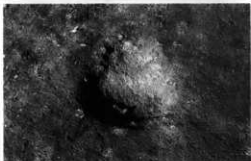
Y-7号住居址遺物出土状態

スナップ



↑ Y-8号住居址(南方より)

Y-8号住居址跡→



↓ Y-8号住居址炭化材出土状態







Y-9号住居址(南方より)



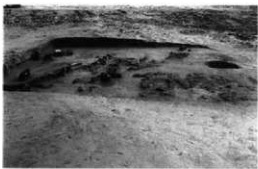
Y-9号住居址張り出しピット



Y-9号住居址炉



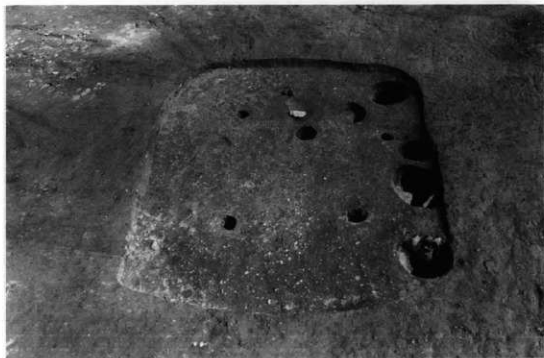
Y-9号住居址遺物出土状態



Y-9号住居址遺物·炭化材出土狀態



奥 Y-10号住居址 手前 Y-9号住居址



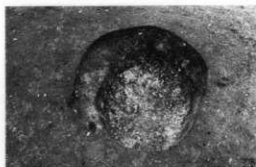
Y-10号住居址(西方より)



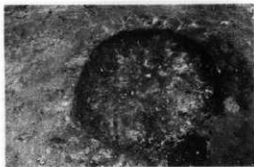
棚田遺跡Ⅱ地区



H-1号住居址



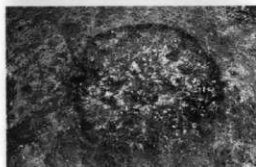
D | 7



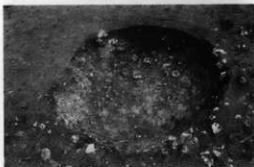
D | 8

版

21



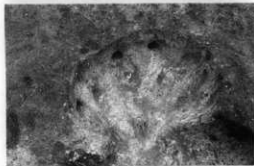
D | 9



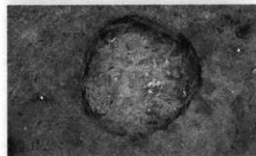
D | 13



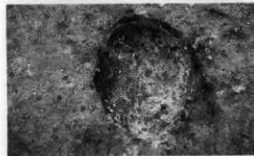
D | 14



D | 15



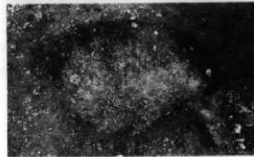
D | 16



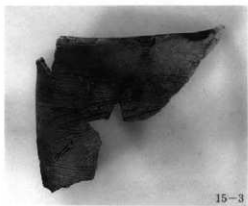
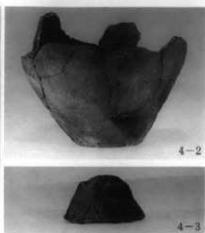
D | 17



D | 18



D | 19



上段 Y-2号住居址出土土器

下段 Y-3号住居址出土土器



15-5



15-6



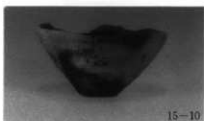
15-7



15-8



15-9



上段  
Y-3号住居址  
出土土器

下段  
Y-4号住居址  
出土土器



18-1



Y-4号住居址  
出土土器



18-5

Y-5号住居址出土土器







21-3



21-7

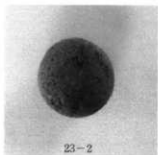


21-6

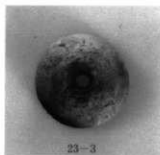
Y-5号住居址出土土器



23-1



23-2

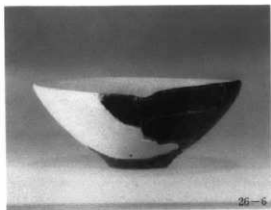


23-3

Y-5号住居址出土石器·土製品

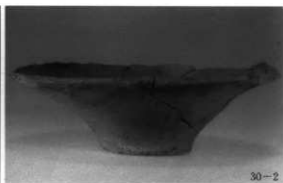


炭化木



26-4

Y-7号住居址出土土器



Y-8号住居址出土土器



Y-9号住居址出土土器



37-1

Y-9号住居址出土土器

37-2



H-1号住居址出土土器

41-1



46-1

黒色帯内出土縄文土器



47-1



47-2



47-3



47-4



47-7



47-8



47-9



47-5



47-6

細田遺跡出土石器

御代田町の埋蔵文化財発掘調査報告書

- 第1集 御代田町教育委員会 1975 『馬瀬口下原古墳群』  
第2集 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』  
第3集 御代田町教育委員会 1985 『宮平遺跡』 —遺構編—  
第4集 御代田町教育委員会 1986 『大沼遺跡』  
第5集 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』  
第6集 御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』  
第7集 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』  
第8集 御代田町教育委員会 1989 『広畑遺跡』  
第9集 御代田町教育委員会 1990 『聖原II遺跡』  
第10集 御代田町教育委員会 1991 『川原田・城之腰遺跡発掘調査概要報告書』  
第11集 御代田町教育委員会 1992 『城之腰遺跡』  
第12集 御代田町教育委員会 1992 『細田・下弥堂・塚田・下荒田遺跡発掘調査概要報告書』  
第13集 御代田町教育委員会 1993 『川原田遺跡』 —平安・中世編—  
第14集 御代田町教育委員会 1993 『細田遺跡』  
第15集 御代田町教育委員会 1993 『滝沢遺跡発掘調査概要報告書』  
第16集 御代田町教育委員会 1993 『西駒込・東二ツ石・湧玉遺跡』

---

---

## 細 田 遺 跡

長野県北佐久郡御代田町細田遺跡発掘調査報告書

1993年3月25日 発行

編 集 御代田町教育委員会  
発 行 御代田町教育委員会  
印 刷 ほおずき書籍株式会社

---

---

